



聖徒の道

8

1981



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

国際機関誌

編集主幹：
・ ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
デザイナー：
ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・プライス

も く じ

「心をつくして行ない、これをなし遂げた」	スペンサー・W・キンボール	1
我が家の偉大なホームテイチャー、ブレードン兄弟	シャロン・エルウェル	7
不活発会員を強める	A・セオドア・タトル	10
4,800千口にかけた婦人	E・デール・レバロン	19
質疑応答	ウィリアム・E・ベレット	22
小さな本	ジャック・フェルショー	26
嵐	キース・ブラウン	28
神権の力が確かに存在した	A・ヘイマ・ライザ	34
告白	J・リチャード・クラーク	36
パロワンでの出来事	オリーブ・W・バート	38
きせかえにんぎょう		42
小さなお友だちへ	ジョリーン・メレディス	43
ローカル・ニュース		46

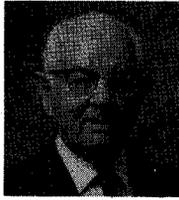
聖徒の道 8月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定 価 年間予約2,200円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0609 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日^{まつじつ}聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



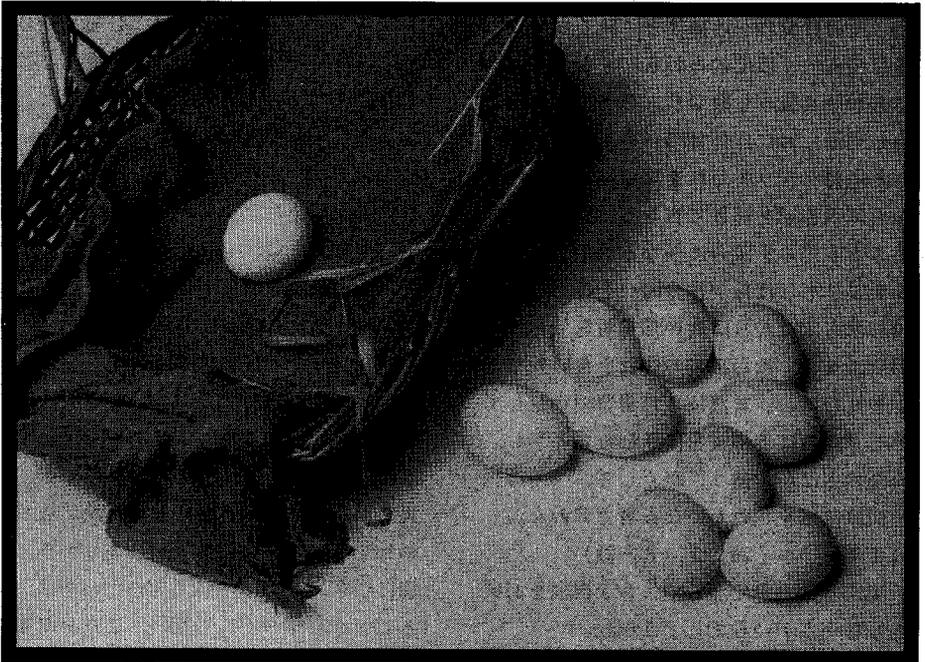
「心をつくして行ない これをなし遂げた」

大管長
スベンサー・W・キンボール

経済不安が募る今日にあって、私たちは個人としても教会としても、もう一度思い起こさなければならないことがあります。それは、主が与えられた霊にかかわる

経済上の律法です。これに完全に従う人には、「あふるる恵み」(マラキ3:10)を注ぐと主は約束されています。

この百分の一の律法は、私たちにとって



尽きることのない恵みと安らぎ、神の確かな助けの源となり得るものです。旧約の時代の予言者たちの教えの中でも什分の一の律法が改めてニーファイ人に授けられたことに、私はいつも深い感銘を受けます。主はニーファイ人を訪れた時、什分の一に関するマラキの大いなる約束をお伝えになりました。

「またイエスは御父がマラキに授けたもうた言葉であって、今自分がその弟子たちに伝えようとする言葉を書けと言うこともその弟子たちに命じたもうた。そして、弟子たちがこれを書いてしまうと、イエスはその説明をなしたもうた。その言葉は次のようである『御父はマラキに宣えり。……見よ、人は神の物を盗まんや。されど、汝らはすでにわが物を盗めり。しかも汝らは、何に於てわれらは神の物を盗みしやとたずぬ。そは什分の一と捧物とに於てなり。汝らはのろいを以てのろわる。汝ら全国の民はわが物を盗みし故なり。わが家に食物あらしめんために、什分の一をことごとくわが倉に持ち来りてわれを試し見よ。われが汝らに天の窓を開きて容る所なきほどのあふるる恵みを汝らに与うるか与えざるかを見よ。もし汝らが什分の一をことごとく持ち来らば、われは食い荒す者を汝らのためにふせぎ、汝らの畑の作物を食い荒すことを止むべし。また汝らの葡萄の木をして熟せざる内にその実を落さしめざるべし。万群の主はかく言う。かくして、……万国の民は汝らをさいわいなる者と言わん。』」
(Ⅲニーファイ24：1，8—21)

現代の世の中で、このような祝福を必要としない人がいるでしょうか。

苦難の時代に住んだ民がほかにもいます。ユダ王国の人々です。アハズ王の不正な統治下にあった人々は、アッスリヤとベリシテびとの手にかかって、経済的にも政治的にもつらい思いをしました。しかしその苦しみも、若いヒゼキヤが王になり、「主の良しと見られることをした」(歴代下29：2)ので取り除かれたのです。こうして、人々の心は再び聖典の教えに向き、戒めも守られるようになりました。この後の記録を読むと、主が御自身の約束をどのように成就されるかがよくわかります。

「その命令が伝わるやいなや、イスラエルの人々は穀物、酒、油、蜜ならびに畑のもろもろの産物の初物を多くささげ、またすべての物の十分の一をおびたたく携えて来た。……また牛、羊の十分の一ならびにその神、主にささげられた奉納物を携えて来て、これを積み重ねた。ヒゼキヤおよびつかさたちは来て、その積み重ねた物を見、主とその民イスラエルを祝福した。そしてヒゼキヤがその積み重ねた物について祭司およびレビびとに問い尋ねた時、サドクの家から出た祭司の長アザリヤは彼に答えて言った、『民が主の宮に供え物を携えて来ることを始めてからこのかた、われわれは飽きるほど食べたが、たくさん残りました。主がその民を恵まれたからです。それでわれわれは、このように多くの残った物をもっているのです』。ヒゼキヤはユダ全国にこのようにし、良い事、正しい事、忠実な事をその神、主の前に行った。彼がその神を求めするために神の宮の務につき、律法につき、戒めについて始めたわざは、ことごとく心をつくして行い、これをなした

げた。」(歴代下31：5—6，8—10，20—21)

主は苦難の時代にあってもユダの人々を栄えさせられたのです。それは詩篇の次の言葉をまさに証明するものです。「地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。」(詩篇24：1)

末日に主は聖徒たちに、戒めを守り「汝の捧物……を奉るならば、「地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし」と言われました。「すなわち野の獣、空の鳥……地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために造られ……」(教義と聖約59：12，16，18) たからです。

いつの神権時代の予言者も、什分の一の律法とその祝福、主の民が受ける加護についてははっきりと教えてきました。これについて、末日の神権時代に主はどのように言っておられるでしょうか。

「誠に、かくの如く主は言う。……かくの如く什分の一を納めたる者は、以後毎年彼らの得る全利益の什分の一を納むべし。これを以て、わが聖なる神権のためにする彼らの守るべき永久的定法となす、……われ汝らに告ぐ、もしわが民にしてこの律法を守りて聖く保たず、またこの律法によりてシオンの地をわれに聖くして以てわが律令と審判とをそこに保ち、その地を最も聖きものとなさずば、見よ、誠にわれ汝らに告ぐ、そは汝らにとりてシオンの地にあらざるべしと。こは、あらゆるシオンのステーキ部に通ずる範例なり。誠に然り、ア—メン。」(教義と聖約119：1，4，6—7)

この中で主は、什分の一は主の律法であることを言明し、主に従うすべての人にこ

れを守るよう求めておられます。神のこの律法に従うことは、私たちにとって誉れであり特権です。また安らぎであり約束であり、祝福です。この戒めを完全に守らない人というのは、自らこの主の約束を否定する人であり、大事をなおざりにする人であると言えます。そうになると什分の一を守らないことは罪であり、簡単に見過ごしにできない問題となるのです。

確かに、収入が乏しいのに求められることばかりが大きいと、什分の一を納めるのに強い信仰を表わす必要があるかもしれません。そんな時には、御父がマラキに与えられた約束を心に思ってください。また、主が末日に与えられた約束を思い浮かべるとよいでしょう。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82：10)

こういった原則は、両親が定期的にもしかも生きた証をもって子供たちに教えるようにするのがよいでしょう。まだ子供のうちに教えることが大切です。幼な子の心は吸収しやすく、素直に親の教えを受け入れることができるからです。

少年時代のことを思い出します。収穫物の什分の一を納める日には、母とよく監督の家まで砂ぼこりの道を歩いたものです。道々私は母に尋ねました。「どうして卵を監督のところへ持って行くの？」すると母はこう答えました。「これは什分の一の卵なの。天のお父様への什分の一を監督さんが預かってくれるのよ。」それから、毎晩卵を集めてくると、最初の1個を小さなかごに入れ、残りの9個を大きなかごに入れた

ことを話してくれました。こうして私は、愛する母から什分の一の律法について学んだのです。

家の西には菜園がありました。そこにはじゃがいもも植えられていました。ある日妹と私は父からこう言われたことを覚えています。「私たちには食べきれないほどたくさんじゃがいもがある。お前たちが売りに行きたければ、そうするがよい。」妹のアリスと私はじゃがいもを掘り出すと、ホテルまで運んで、それを売ってきたのです。これだけになりましたと、お金を父に見せると、それをどうするつもりかと聞かれました。私たちは、ふたりで分け合って欲しいものを買うつもりであると答えたところ、父はこう質問してきました。「什分の一はどうするのかね。」そしてこんな話をしてくれたのです。「主は私たちのためになることをして下さる。私たちは苗木を植えたり耕したり、収穫したりするが、この地は主のものなんだよ。雨も日光も主が注いで下さる。什分の一は主のものなので、私たちはいつもそれを主にお返しするんだよ。」父は私たちに什分の一を納めることを強制したわけではありません。ただ私たちに理解できるように説明し、什分の一を納めることが誉れであり特権であることを感じさせてくれたのです。

前にもお話したことがあります。友人の牧場へ連れていってもらった時のことです。友人は新しい大きな車のドアを開け、中に体をすべり込ませると、得意気に言いました。「僕の新車どう？」快適な乗り心地でした。車は田園地帯に入り一軒の新築の家の前で止まりました。美しい家で、見晴

らしのよくきくところに建っていました。彼はまたも誇らしげに言いました。「これが僕の家だ。」

彼は草の生い茂った丘に向かって車を走らせました。太陽が丘の向こうに沈もうとしています。彼は広大な自分の土地を見渡ししながら北の方を指して言いました。「向こうに林が見えるだろう。」夕暮れの中にその林が浮かんで見えました。

今度は東を指して言いました。「湖が夕日に輝いているね。」それも見えました。

「今度は南、向こうに切り立った崖があるね。」私たちは向きを変えながら遠くの方に目をやりました。そして彼は、西の方にある小屋やサイロ、家の一つ一つ説明してくれました。「あの林、湖、それからあの崖、農場の建物、これに囲まれた土地は全部僕のものなんだ。」彼はゼスチャーたっぷり自慢しました。「それから牧場の方に牛の群れが見えるだろう。あれも全部僕のものさ。」

そこで私は、このような財産をだれから手に入れたのかと尋ねました。彼は不動産権利書をいくつか持っていたために、政府からその土地を譲り受けたのでした。弁護士はその土地が抵当に入っていないことを証明してくれていました。

「政府はこの土地をだれから手に入れたのかね。」私は尋ねました。「政府はこの土地の代償として何を支払ったのだろうか。」

私の心にパウロが大胆に語った詩篇の作者の言葉が浮かんできました。「地とそれに満ちている物とは、主のものだからである。」(Iコリント10:26)

それから私はこう尋ねました。「その権

利は地球の造り主であり所有者である神から与えられたものではないかな。神は支払いを受けたのかね。この土地は君が買ったものか、借りたものか、それとももらったものか。もらったのなら、だからだろう。買ったのなら、いくらで買ったのか。借りたのなら、きちんと地代を払っているか。

私はこう続けました。「とにかく、いくらだったんだい。この農場は何と引き換えに手に入れたのか。」

「金だよ。」

「その金はどこから手に入れた？」

「僕の苦痛と汗と労働と力によってさ。」

私はまた尋ねました。「じゃ聞くが、君に苦しみに耐える強さ、働く力を与え、汗を流させているのは何だい。」

彼は食べ物だと答えました。

「じゃ、その食べ物はどうしてできるのかな。」

「日光と空気、それに水と土だ。」

「じゃ、そうした要素を地上にもたらしたのはだれだね。」

私は詩篇を引用しました。「神よ、あなたは豊かな雨を降らせて、疲れ衰えたあなたの嗣業の地を回復され……ました。」(詩篇 68:9)

「じゃ、土地が君のものでないなら、君は土地の所有者にどれだけ地代を払うかね。聖書には『カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい』とある。君は収入のうちどれだけカイザルに返しているかね。神には何パーセントかな。」

「君は聖書を信じているかな。予言者マラキが述べている主の戒めを受け入れるだ

ろうか。モーセがバロに言った、地が主のものであるという言葉信じることか。」

私は続けました。「聖典のどこを開いても、神がこの土地の権利を君に無条件で与えられたとは書いていない。」

そういう聖句は見つからないが、詩篇にはこうある。「……主を待ち望む者は国を継ぐからである。」(詩篇 37:9)

私は天父が天上の大会議で私たちに約束したもうたことを思い出す。「われら降り行かん。かしこに空間あればなり、而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。」(アブラハム 3:24)

こうなると、単に金を払えば権利が手に入れられるということだけでは説明がつかなくなる。

これは地を譲り渡すということではなく、神の戒めを守るという条件の下で人に用いさせるということなんだ。」

友人は納得のいかない様子でぶつぶつ言っていました。「これは僕のものだよ」と、まるで自分が卑きょうな借地人であるという明確な事実を、心の中で打ち消そうとするかのように。

あれからどれだけ年月が経過したでしょう。私は彼が宮殿のような家の中で、ぜいたくな家具に囲まれて息を引き取るのを見ました。彼の財産は途方もなく大きくなっていました。私は彼の手を胸の上で合わせました。葬儀では追悼の話をし、その後行列について墓まで行き、ひつぎを埋葬したのですが、彼が自分の所有だと宣言していた広大な土地と比べ、その墓はあの背が高く太った彼がちょうど収まるくらいしかなかったのです。

後日、私は彼が自分のものだと主張していた土地を訪れました。黄金色に色づいた穀物、緑の牧草、白い綿花。自然は主人を自称していた者が世を去っても少しも変わっていませんでした。

愛する兄弟姉妹、証します。什分の一は実に偉大な祝福の源であり、私たちを益するために与えられた律法です。家族を集めて、御父より注がれると主が証しておられる約束をもう一度読んでみていただきたいと思えます。だれもがこの約束を手にすることができのです。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10)

「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア24:15) この聖句を私たちのモットーとしようではありませんか。

私たちがこれを実行し、ヒゼキヤのように心を尽くして戒めを守れば、主は苦難の時代にあっても私たちを導いて下さいます。その時に私たちは、私たちに注がれた主の助けをしみじみと感じ、主の数々のみ恵みと思いやりに深い愛と感謝の念を向けるようになるでしょう。主は私たちの救い主であり、偉大な力を有する御方なのです。私たちがふさわしい者である限り、私たちの中にあつてこの大変な時代を切り抜けるよう助けて下さいます。私はこのことを確かに知っています。

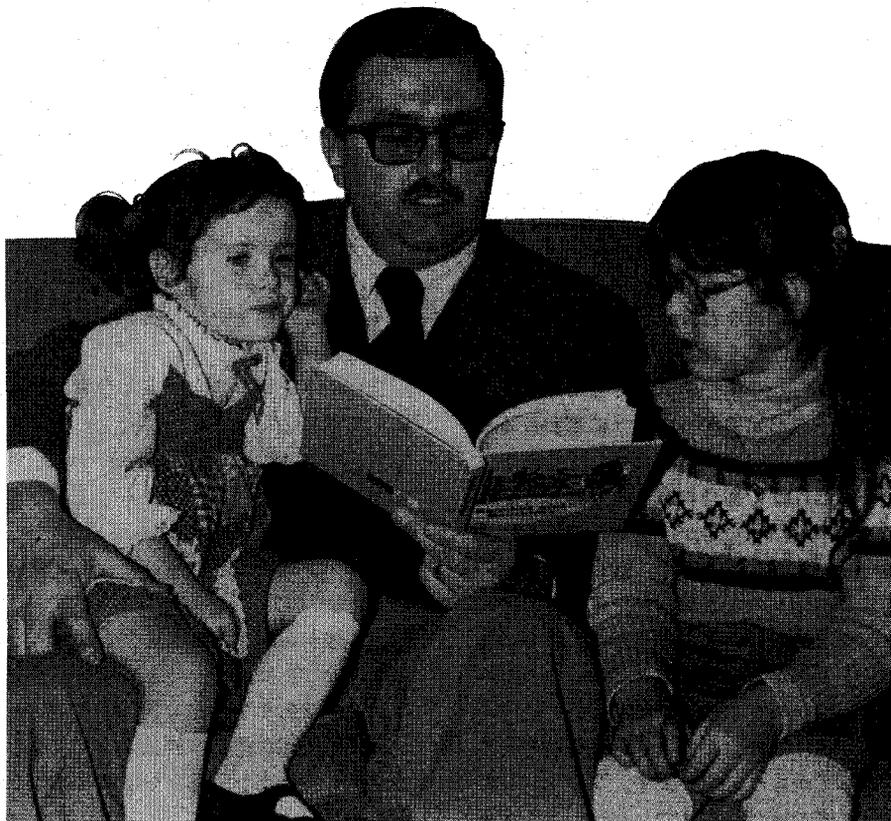
ホームティーチャーへの提言

1. 什分の一の祝福について自分自身の証を述べる。家族の中で、このような経験がある人にその時の気持ちを話してもらおう。
 2. この記事の中に、家族が朗読できるような聖句があるだろうか。また、それ以外の聖句で一緒に読みたいと思うようなものがあるだろうか。
 3. キンボール大管長は、什分の一は経済に関する律法であると同時に、霊にかかわる律法でもあると指摘している。什分の一の霊的な祝福について話し合う。
 4. 什分の一を納めることを習慣づけるにはどうしたらよいか、その方法について尋ねる。
 5. 前もって訪問先の家長と打ち合わせておくと、もっとよい話し合いができるのではないだろうか。定員会リーダーや監督から、什分の一に関して家長に伝えるメッセージはないだろうか。
-

私は手術を翌日に控えて入院していました。それで夫は勤めからの帰り道、私の様子を見に寄り、ジャッキー（私たちのお気に入りのベビーシッター）がワード部のピクニックに我が家の3人の幼い娘たちを連れて行ってくれたことを話してくれました。ジャッキーの父親が病室に入ってきたのは、それから5分ほどしてからでした。ジャッキーの父親の話では、我が家の末娘

がシーソーから落ちてあごにひどい傷を負い、今下の応急処置室で傷を縫い合せているところだということでした。

ピクニックに行っている間に、6歳の末娘はあたりを見回して、ふと自分の家族がだれもいないことに気づいたのでしょう。そこには一緒に行ったひとりの姉だけしか見当たらなかったのです。しかしその姉も日曜学校のクラスのお友達と遊んでいまし



我が家の偉大なホームティーチャー、ブレードン兄弟

シャロン・エルウェル

た。娘にとってその公園は不案内でしたし、刻一刻とあたりは暗くなっていきます。娘の心にはいろいろな思いがどっと浮かんできました。そして突然、人々の耳に娘の悲鳴が聞こえたのです。その時、娘は自分が何をすべきかをちゃんと知っていました。娘は「ホームティーチャーに会いたい」と言ったそうです。ものの数分もたたないうちに娘はブレードン兄弟のやさしいひざに抱かれていました。もう心配することはありませんでした。

私は、彼のようなホームティーチャーはほかにいないと確信しています。ブレードン兄弟の方法は彼独特のものですが、その結果は、ホームティーチャーあるいは訪問教師としてよく奉仕したいと思っている私たち皆にとって模範となるものです。ブレードン兄弟をホームティーチャーに持つ家族はどこも、彼を自分たちだけの最良の友、真っ先に助けてくれる人、真夜中にでも電話をかけられる第一の人と考えています。

ブレードン兄弟がこのように慕われる秘密はどこにあるのでしょうか。ブレードン兄弟はこれまで担当の家族に奉仕してきたわけですが、私たちが「ええ、みんな元気です」と言うのをやめて、「御存じとは思いますが——のことが気がかりなんです。あの子と話していただけるとうれいのですが」と気がねなく言えるようになったのは、いつからでしょうか。

きっかけはたぶんフィンレー姉妹の一件を知ってからだと思います。フィンレー姉妹は腰痛で寝たつきりでしたが、ある夜痛みに耐えられなくなって、ブレードン兄弟に祝福をしてくれるように電話しました。すると即座にかけつけてくれたというのです。

我が家の場合は、夫のジョンが遅くまで働いていた夜に起こりました。娘のケイティーが夕食後、突然熱を出して、長椅子にぐったりとなっていた時のことです。苦しそうな声を出していました。ブレードン兄弟がドアをノックしたのはちょうどその時でした。ブレードン兄弟が椅子に腰を下ろすなり、ケイティーははうようにしてブレードン兄弟のひざにもたれかかり、いかにもほっとした様子を見せて寝入りました。その姿を見ていて、私は彼に娘をベッドに寝かせて帰ってくれるようにとは言えませんでした。ブレードン兄弟は、ケイティーを気づかってひざに抱いたまま、夫が帰宅するまでいてくれました。それから彼は帰り道、薬局に寄って薬を買ってきましょうと言ってくれました。そればかりではありません。その夜遅くと翌日、ケイティーはホームティーチャーから具合を尋ねる電話をいただいたのでした。

ブレードン兄弟のもうひとつ異なる点は、決して数をこなすような訪問をしないことです。教会の集会が終わった後、「お元気ですか?」と聞くだけでホームティーチングをすませてしまうようなことはしません。ブレードン兄弟は我が家にただ姿を見せるのではなく、話をしに来て下さるのです。私たちは彼から、もっと大切な家族があるので急がなければならないといった印象を受けたことはありません。我が家もブレードン兄弟の大切な担当家族なのです。そして、彼自身もそのことを私たちに知らせてくれます。

ブレードン兄弟の教え方はユニークなものに違いありません。テネシー生まれなので、小さいころにしたいろいろないたずらや海軍時代の愉快な船の上での冒険談をた

くさん知っています。ですから彼がさっと我が家の状態を見た後、お話のひとつもしないで帰りでしたら、私たちは本当にがっかりしてしまうことでしょう。彼が喜んで時間を割いてくれることが、彼の私たちに寄せる愛の何よりの証拠なのです。

また彼ほど忍耐強い人もいないでしょう。我が家の3人娘を一度にひざに抱くのですから。私も子供が言うことをきかなくてどうしてもだめな時に、1度か2度抱こうとしたことがあるのですが、到底できることはありませんでした。そして、いやな顔ひとつ見せずに、じっと娘たちが髪をとくのまかせていられます。ブレードン兄弟はとても几帳面な人ですが、子供たちと遊んで下さった後で、美しい白髪が乱れて上に突き出ているのを見ると、日の光栄の人格を備えた人という確かな証拠を見ているようです。

ブレードン兄弟はすぐそれとわかる愛や関心を示すだけでなく、自分が関心を示すのは召しから言って当然のことだということも明らかにしています。家族の誕生日には必ずやって来て下さいますし、クリスマスやイースターの時にはまた、「あなたのホームティーチャーより愛をこめて」と書き添えた贈り物を子供たちに持ってきて下さいます。このようにしてブレードン兄弟は、他の人を思いやることは天父に対する私たちの義務であることを子供たちに教えて下さっているのです。

ブレードン兄弟は我が家の大切な出来事にも参加して下さいますが、それは彼の方からの一方的なものではありません。長女のジェーンが断食証会で確認の儀式を受けることになっていた時のことです。ジェーンはブレードン兄弟の姿が見えないので、

そわそわと落ち着かない様子でした。自分の家族に囲まれていても十分ではなかったのでしょう。ブレードン兄弟が別の集会から遅れて入ってきて、後ろのドアに一番近い席に腰を下ろした時は、それは満足気でした。ジェーンは、自分のためにブレードン兄弟が他の計画を喜んで犠牲にして下さったことがわかっていました。ジェーンは自分の名前が呼ばれると、通路を歩いてブレードン兄弟のところへ歩み寄りました。そして、ふたりは手に手を取って確認の儀式の輪のところに戻り、娘の人生で最も大切なひと時を共にしたのです。

天の教えもこの世の人々によってつぶさに示されれば、どんなにか明白で理解しやすいことでしょう。ジェーンの8歳の誕生日にブレードン兄弟が下さった本には、バプテスマと奉仕についての非常に重要な原則が自筆で書かれてあります。そして最後にこう書いてあります。「天のお父さまはあなたを愛しておられます。そして、あなたが幸福になることを望んでおられます。あなたのホームティーチャー、ブレードン兄弟より」我が家の子供たちが天父の愛をととてもすんなりと感ずることができているのは、自分の愛の気持ちを表現し、家族以外の人を信頼することを知っているからでしょうか。

私も訪問教師としてブレードン兄弟のようになりたいと願っています。それは家庭訪問について良い話を聞いたからとか、だれかが私の義務に気づかせてくれたから、またこれを怠ると家庭訪問率が低下するかも知れないからという理由からではありません。自分の召しを本当に理解したひとりの人が、その大きな可能性を示して下さいたからなのです。

不活発会員を 強める

七十人第一定員会会員
A・セオドア・タトル

再 活発化は、教会における他のあらゆる努力を成功に導く最も重要な鍵である。よく調べてみると、ワード部の活発なメルケゼデク神権者のパーセンテージこそ最もよくそのワード部の成長を示していることがわかる。子供たちが霊にかかわる目標を達成する上で、両親の模範の力が他のいかなるものにもまして重要であることから考えても、私たちは予防と活発化というこのふたつの方法を通して不活発の悪循環を断ち切らなければならない。

ホームティーチングは人々を活発にするための手段である。これにとって代わるいかなる新しいプログラムおよび組織も見いだすことはできない。

教会の指示によると、ホームティーチングは月一度の訪問に限られているわけではない。活発な会員であれば、月末にあたふたと訪問しても別に問題は起こらないかもしれない。しかしそのような方法で活発になるとしたら、それは偶然というものであ

る。

活発化させるにはホームティーチングをしかも理想的なホームティーチングを続けて行なう必要がある。ではすぐれたホームティーチャーもいればそれほどではない人もいることがわかっていながら、なぜ活発化のためにホームティーチャーが使われるのだろうか。それは主が彼らに委任されたからである。(教義と聖約20：53—55参照)ここに、単にホームティーチングに行くということと遣わされるということの違いが出てくる。

マリオン・G・ロムニー副管長はこのように言っている。「私たち一人一人に責任がある……私たちの管理の下にいる人々が誓約を破った場合、それが私たちがよく教えなかった結果起こったことだとすれば、それについても責任があるのである。」(『誓約に従って』「聖徒の道」1976年2月号)

救い主は、今まだ広く応用されていないひとつの原則を教えられた。「あなたがたの



うちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。」(ルカ15：4) 私たちは、活発な人々に払っているよりももっと多くの関心を、不活発な人々に対して払わなければならない。

見いだす

不活発な人々を不活発としてひとつのグループに入れてしまうこともできるが、彼らを活発にするためにはまず最も受け入れやすい人々を見だし、そのような人々から働きかけていかなければならない。

モルモン経の中のひとりの兄弟はその良い例である。アルマ書10章5節の中で、アミュレクは自分の不活発な状態をこう述べている。「私は主の道と奥義と驚嘆すべき能力とについては、まだ多くのことを知っていない。」ここに問題がある。往々にして不活発な人々は、福音を十分に教わっていないのである。

彼はこう続けている。「ところが私は心をかたくなにしてたびたび呼ばれても聞き従おうとしなかった。それであるから、これらのことが確にあることを知りながら、これらについて知りたがらなかった。」(アルマ10：5-6)

ホームティーチャーや両親、他の人々が彼に活発になるよう一生懸命働きかけたと思われる。しかし彼はそれらのことを正しいと知っていながらも、心をかたくなにして決して受け入れようとはしなかった。

彼は自分が人々の間では少なからぬ名誉ある者であり、自ら努め励んで大きな富を得たと言っている。

彼はただ福音をよく理解していないだけで善良かつ熱心な働き者だったのである。そして内心は活発にならなければならないと何年も思い続けてきていた。彼は活発な状態に戻るべきであるとわかっていながらなおも反抗し続けていたのである。

主はアミュレクの心をすべて御存じであった。そこでアルマを送って彼にホームティーチングをさせ、活発にさせようとしたのである。アミュレクは準備ができていた。そしてアルマは彼の家を訪れるために導きを必要とした。それからどんなことが起こったかは御承知の通りである。(アルマ8：14-22, 10：7-9 参照)

どのワード部にも、アミュレクのような善良で正直な人が大勢いる。知識はあるがまだ十分ではない人、病気で教会を離れている人、もっと充実した生活を望んでいる人々である。このような人々の中には善良な父親もいれば町の指導者もいる。そのほとんどが知識と証を持たないだけの普通の末日聖徒である。ただ彼らに共通していることは、家庭にあって霊的指導者でないという点である。

信仰ある人々がこれらの兄弟たちを訪ね、友となって彼らを愛し、福音を教えるならば、彼らとその家族は必ずや戻って来るに違いない。

不活発になるのを防ぐ

不活発という問題を解決するにはふたつする方法がある。不活発にならないよう前もって手を打つことと、再活発化をはかることである。これらは同時に行なわれなければならない。不活発な成人の後には不活発な若者が続く。調査の結果、不活発は年齢的に早くから始まることがはっきりしてい

る。すなわち、不活発な両親の子供たちは、小さいうちから不活発になる傾向にあるのである。

活発、不活発を問わず、両親は自分の子供たちに対して責任がある。だれも両親の特権を侵害すべきではないが、監督会には若人たちが不活発にならないよう援助する既定の責任がある。では指導者は何をすることができるだろうか。

活動の回数や費用は大して重要ではない。大切なのは若者と指導者との親しい関係である。若者の指導者は不活発な人々に手を差し伸べなければならない。彼らと友達になって一緒に行動し、彼らの特別な必要を満たしていただきたい。

そしてどの活動も意義深い価値あるものとなるよう、奉仕の精神と靈性の高揚を目指して彼らとの活動を強めて頂きたい。

ミズーリ州のあるステーキ部長会は、導かれて19歳から26歳までの若い兄弟たちと面接を行なった。面接を受けた15人のうち、12人は現在伝道に出る準備をしている。世界中の教会には機会さえあれば同様の反応を示す人々がもっと大勢いるはずである。

人に合わせた教え方をする

不活発な人を見いだして助けるには、メッセージをその人に合わせなければならない。ではジョーンズ兄弟の場合を見てみよう。彼はホームティーチャーが来るといつも彼らの話にさからった話をするようにしていた。新しいホームティーチャーと同僚がジョーンズ兄弟の家を訪ね、奥さんや息子さんに会った時、家族には少しも受け入れようとする気持ちが見られなかった。ホームティーチャーは訪問のたびに決まったように天気のことについて話した。ところがこ

れが効を奏したのである。というのは、ジョーンズ兄弟は気象学者だったのである。彼は非常に頭が良く、ホームティーチャーを少々おびえさせるような雰囲気さえ持っていた。しかし彼らは毎月定期的に数カ月間にわたって彼を訪問した。

それから長老定員会会長との個人面接の折、そのホームティーチャーはジョーンズ兄弟にタバコをやめることを勧めてみるように言われたのである。そのホームティーチャーはこのように答えた。「私にはできません。まだむずかしいんじゃないでしょうか。」

しかし長老定員会の会長はこのように言い張った。「次の面接の時には、タバコをやめるように勧めた時のジョーンズ兄弟の反応を報告してもらいますよ。」

個人に合わせた教え方をする最良の方法というのは、定員会の会長とホームティーチャーが、その家族のために何をしてあげられるかをいろいろ話し合うことではないだろうか。双方がその家族について知っていることと家族に対する気持ちを出し合い、主ならどうされるだろうかと祈った後で、ホームティーチャーにその仕事を割り当てるのである。

次の訪問の時、ホームティーチャーは勇気をもってジョーンズ家に赴いた。今度はただ訪問するというのではなく、遣わされているという気持ちであった。私たちは遣わされているという気持ちがあると訪問するにも一層勇気がわいてくるものである。ホームティーチャーが使いという気持ちで訪問できるよう彼らに特定の事柄を割り当てること、これが神権面接の真の目的のひとつである。私たちはヤコブの「私ヤコブはまず主から使命……を授けられ」（ヤコ

ブ1：17) という力強い教えを思い起こす。

ジョーンズ家を訪問したホームティーチャーは前半はいつものように進めていった。しかし次第に落ち着きをなくしていった。彼は何をしなければならぬかわかっていたが、それをするだけの勇気がないように思えたのである。訪問の3分の2が過ぎた頃、ホームティーチャーは深呼吸をし、主に力を願うとついに話を切り出した。

「ジョーンズ兄弟、私たちからの今晚のメッセージは簡単なものです。」ジョーンズ兄弟の目がホームティーチャーの目と会った瞬間、ホームティーチャーはこう言った。「今晚お話ししたいことは、あなたにタバコをやめていただきたいということです。」

2, 3秒間沈黙があった後、ホームティーチャーが再び話し出した。「なぜタバコをやめていただきたいかと言いますと、私たちがジョーンズ兄弟を愛しているからです。」

そのホームティーチャーの誠実な声の響きはみたまどあいまって、ジョーンズ兄弟にそのような感動的な勧めをしたのは確かにそのホームティーチャーの愛によるものだとすることを理解させたのである。

ジョーンズ兄弟はやっとの思いでこう言った。「タバコをやめるのはどんなに辛いことかわかりますか。」

ホームティーチャーはこう答えた。「私にはよくわかりません。でもジョーンズ兄弟ならきっとできると思います。そうしなければならぬのです。あなたはこの教会で必要とされています。活発な会員に戻るための第一段階はまずタバコをやめることです。」

ジョーンズ姉妹が話に割り込んできて言った。「あなたならできます。きっとできますとも。」

「ああ、なんとかやめたいものだ。」ジョーンズ兄弟は答えた。

それから少し話した後、ホームティーチャーがこのように言った。「ぜひ教会に戻って来て下さい。」

ジョーンズ兄弟の答えはこうだった。「それはできませんよ。私は少しも活発じゃないですからね。」

ホームティーチャーはすかさずこう言った。「いいえ、活発ですよ。私は兄弟が小さな息子さんと手をつないでこのあたりを散歩しながら、小鳥のことや草木のことを教えておられたのを見ました。それこそ教会が最も大切に考えていることです。自分の子供を教えるということですよ。」

ジョーンズ兄弟はこれに対して反発する口調もなく淡々とこう言った。「私には組織立った宗教に入っとうまくやっていくなんてできないんですよ。」

ホームティーチャーはこのように答えた。

「でも家で家庭の夕べを開くこともできます。そんなにきゅうくつに考えないで私たちのホームティーチングのような感じでやってみてはどうですか。それなら組織立った宗教という感じはしないでしょう。その中でお祈りすることもできますし、家庭の夕べのテキストを使うこともできます。」

それからホームティーチャーは家族と祈りをし、帰って行った。後に、ジョーンズ兄弟はそのホームティーチャーの娘にこう言っている。「あなたのお父さんは私が今まで出会った人の中で最も素晴らしい人だよ。」

その不活発だった兄弟は現在監督会の一員である。このホームティーチャーは、担当の兄弟の必要に合わせた教えをしなければならなかった。それは主がホームティー

チャーを通して彼にお与えになったものである。

訪問はふたりずつ組んで行くのが望ましい。時折、その人と個人的に話した方がよい場合もある。時間や状況が限られてしまっているような場合は、個人的に会って話す方が都合がいいし、メッセージの内容によってはその人の奥さんや子供の前ですべきでないものもある。

不活発な人というのは、医者にかかっている患者のようにそれぞれ異なっている。熱を計ってもらいアスピリンを飲ませてもらうなければならない人もいれば、大変な悪性腫瘍で苦しんでいる人もいる。それぞれに集中的な治療が必要なのである。

人によっては直接的なアプローチを用いる

宣教師のアプローチは直接的である。そのような方法をとらなければ、多くの人が悔い改めのメッセージに応えることができなくなる。これと同様のアプローチを必要とする不活発会員が大勢いる。

恐らく不活発な男性会員の10パーセントは、今すぐにも悔い改めの声に応じて長老になり、あるいは神殿結婚をしようと思われる。私たちは彼らを招き入れなければならない。

あるステーキ部で、この直接的なアプローチを取り入れることにした。ホームティーチャーたちは14軒の家を訪問し、その家の父親に直接こう尋ねた。「あなたは長老になりたいと思いませんか。」14人の父親のうち14人全員が「なりたい」と答えたのである。この返事を聞いてホームティーチャーはこう言った。「それでは、私たちにお手伝いさせて下さい。」

ソルトレークミルククリークステーキ部に

は500人の長老見込み会員がいた。ひとり兄弟が指導者にこう言った。「誘いの声をかけるだけで10パーセントの人を活発にすることができます。」その時までには、長老の聖任は年間せいぜい14名位しかなかった。それから2カ月半のうちに、47名の兄弟に次のステーキ部大会で聖任を受ける備えをさせたのである。報告によると、彼ら全員が今なお教会で非常に活発にやっているということである。彼らが成功した理由は何だったのだろうか。ステーキ部の会員たちがそのチャレンジを靈感を受けたものとしてとらえたこと、そして不活発な兄弟たちが自ら変わりたいと思ったことである。

このような経験はほとんどどのステーキ部にもある。直接的なアプローチは成功をもたらしてくれる。

個人的な関係を築く(間接的なアプローチ)

個人的な関係を築くためには、コミュニケーションをよくしなければならぬ。これが方法である。友達になるには不活発な家族と同じ立場に立ってみなければならない。初めての訪問や二度目の訪問では、次のような話題を持ち出すようにする。

「今の時期は木の葉がきれいですね。」

「今シーズンの野球はどこが勝つと思いますか。」

「今年の夏は気持ちのいい夏でした。」

「今年の冬はどんなでしょうねえ。」

「小さい頃はどちらにお住まいでしたか。」

「どんな関係のお仕事ですか。」

正式なホームティーチングのあい間をぬって、たびたび訪問することもできる。たまには同僚を伴わずにひとりで訪問するのもよい。その人の家の芝生の上に立って雑草の抜き方を教えたり、あるいは雑草に慣

れて気にしなくなるための方法などいろいろ話すのである。また畑を耕している所へ行って手伝うのもよい。家族にパンを持って行ってあげたり、自分の家でとれた果物や野菜などを分けてあげることもできる。徐々にその人に愛されるようになるために何でもやってみるのである。その人が犬を飼っている場合にはその犬とも仲良くならなければならない。

子供たちには全員に誕生カードを送るようにし、彼らが何か特別なことをした時には、手紙を書いたり電話をかけたります。このようにしてその家の子供たちに愛され、喜ばれれば、それはその家の父親にも愛されているということになる。だれでも知っているように、確かに娘に気に入られるためにはその娘の母親に気に入られなければならないのである。

個人的に関心を示し、たびたび訪問することによって友情が徐々に培われていく。家族を夕食に招待したり、一緒に公園に行ったり、スポーツを見に行ったり、ピクニックに行ったりするのもよい。ホームティーチングの担当として不活発な家族が割り当てられたなら、彼らの所に出かけて行って親しくするための時間を作らなければならない。このようにして個人的な関係を築くのである。

担当家族が若い夫婦の場合には、おばあさんに行ってもらい、料理やキルティング、家計のやりくり、子供の世話に関する知識を教えてもらうようにする。また自分の妻にその若い奥さんを買物に連れて行かせる方法もある。そして彼女が買物をしている間、自分の子供たちに彼女の子供たちのめんどうを見させるのである。また彼女が何か用事がある時にはいつでも子供たち

の面倒をみることを知らせておく。

御主人がスポーツ好きな人であれば、長老定員会と一緒に野球に招待することもできる。また御主人と息子さんを一緒に釣りに誘うのもよい。あるいは奥さんと一緒に定員会のソーシャルプログラムに招待するのもよい。

このようにして彼らは次第にあなたのことを知っていき、あなたを信頼するようになっていく。そしてあなたが自分たちに関心を持っており、本当に気にかけてくれていることを知るようになるのである。こうして願っていた良い時期が来たら、一対一で神のことについて次のように話を切り出すとよい。「ジョーンズ兄弟、兄弟が家庭にあって霊的な指導者となるようお手伝いさせていただきたいと思います。」それから家族の祈りや家庭の夕べ、福音の勉強や子供たちに聖典を読んであげること、知恵の言葉を守ることなどを提案するのである。

教会のあらゆる組織を利用する

不活発会員に対して、ホームティーチャーのことばかり述べてきたが、ワード部の組織もホームティーチャーにとって大きな助けとなる。ワード部のコーリレーション評議会を通して、ワード部をあげて特定の家族を改宗あるいは活発化させるよう働きかけることができる。神権組織、補助組織を問わずすべての組織に参加してもらい、毎月特定の家族を選んで活発化のために努力してもらうのである。

初等協会と日曜学校の教師はそれぞれの働きを相互調整しなければならない。まず不活発会員の子供たちの名前を捜し、両親を訪ねて子供たちをこれらの組織に来させるようにし、それから初等協会の子供たち

は各年齢別グループでその手助けをするのである。アロン神権者は自分の定員会の中の不活発会員をフェローシップし、若い女性（ピーハイブ、マイアメイド、ローレル）は不活発家族の自分たちと同年齢の女の子をフェローシップする。扶助協会の姉妹たちは、母親と若い女性たちをレッスンやソーシャルに招待し、援助を与えることができる。神権者の兄弟たちは、家庭を訪問して父親が（すでに述べた方法で）活動を始めるように援助し、ホームティーチャーはひき続きホームティーチャーとしての仕事を続ける。

神権役員会では、全体の働きが調整され、集中的に行なわれるように特別な計画を練る。この方法は、年輩の人や若者に真の愛と奉仕の気持ちを形にして示させるという価値のあるものである。

教師も家族も全員が一緒になって努力しなければならない。家族全員が一度に活発になるよう家族の一人一人に同時に目立たないながらも効果ある働きをするのである。

これはキャンペーンの様にはなくごく自然に、参加するすべての人々が真のクリスチャンとしての奉仕の気持ちをもって、穏やかに誠実に行なわなければならない。

福音セミナーを開く

どの不活発会員にも共通して欠けている根本的な事柄がふたつある。証と知識である。福音の原則を教えるためにも、テーマにこだわらず福音セミナーを開くべきである。

これらの兄弟姉妹は次のような事柄を学ばなければならない。(1)福音の救いに関する儀式、(2)ふさわしい状態で神権を受けるための段階、(3)悔改めの段階と神殿推薦状

を受ける方法、(4)活動と奉仕の喜びである。

このようなセミナーは普通、男女5人ずつの割で家庭で開く方がより効果的である。場合によっては教会で開くのもよい。

これらのセミナーを通して不活発な兄弟姉妹の必要を満たすようにする。

リッチフィールドのあるステーク部長からこのような手紙を受けた。「私たちは1977年の夏にセミナーを始めました。それ以来5つのセミナーを管理しています。その結果活発化の対象となっている274組の夫婦がフェローシップ委員として召され、353名の長老見込み会員と奥さんが登録されています。またすでに40組が神殿に行きました。147名の長老見込み会員はセミナーを修了し現在活発にやっています。活発になった人々の多くは指導的立場に立っています。」

祈り

兄弟姉妹を活発にさせるために欠かすことのできないのは祈りである。「世の人々が思う以上に多くのことを祈りによってなすことができる。」(アルフレッド・テニスン『アーサーの死』*The Idylls of the King* 「王の牧歌」415—16行)

私たちは、自分自身と彼らのために祈らなければならない。さらに強い信仰と勇気を願って祈るのである。

天使がアルマに、自分がやってきたのは人々とアルマの父親の祈りに答えたからであると言ったことを思い出していただきたい。(モーサヤ27:14参照)

ミズーリ州のあるワード部からはこのような報告が届いている。「監督会と長老定員会の会長会は、どの兄弟を活発にさせ、次の日曜日の集會に誘ったらよいかを知る

ために断食をして祈りました。そしてその週に、彼らはそれぞれひとりの兄弟に次の日曜日の集會に集うよう誘いかけました。声をかけた6人の兄弟のうち4人が集會にやってきました。その集會の中で、監督は彼らに意見を求めました。するとひとりの兄弟は前の日曜日に（同じ頃に彼らの名前が出されていました）自分の生活を立て直したいというとても強い気持ちに駆られ、その日に教會に行くという決心をしたと話してくれました。もうひとりの兄弟もまた前の日曜日に、同じように生活を立て直したいという気持ちになったと話しました。彼はもう40年間も教會に来ていなかったのですが、もう一度行こうという決心をしたのです。3番目の兄弟は集會の後で監督を捜し出し、これから活発になってしっかりやっていくと約束しました。」

そのステーキ部では、30軒の不活発家族が選ばれ、そのうち16軒はすぐに良い結果を得ることができた。

責任への召し

だれでも皆だれかのようにになりたい、何かをしたいと思っている。私たちは皆認められ、受け入れられ、仲間になりたいと思っている。私たちと同様に、不活発な兄弟姉妹も教會で奉仕する召しを受けたいと思っているのである。ではあなたが本当のあるいは想像上の理由で人々に無視され傷つけられているとする。また責任を解任されてから、権能ある人がひとりも教會の責任のことについて話しかけてこないとする。こうして半年から1年そして数年間「見捨てられ」ているとする。そうした場合、あなたは教會に対して健全な見方ができるだろうか。少なくとも機嫌を損ね、皮肉のひ

とつとも言い、次第に批判的になっていって、ついには不活発になるのではないだろうか。一般的に言って、不活発会員は長い期間無視されている場合が多い。

彼らが関心を示し始め進歩が見られたら、彼らを能力に合った奉仕の責任に召すべきである。もちろん兄弟の場合には、フェローシップをしてくれた人のホームティーチングの同僚として召されることもある。そしてその後ふさわしい召しが来るのである。

不活発な人々は必要とされ求められたいと思っている。彼らは価値あることをしたいと望んでいるのである。彼らにその機会を与えてあげなければならない。

一致した不断の努力を続ける

私たちには次に述べるような適切な目的をもって、不活発な友人や家族が活発になるようやさしく誠実に導く責任がある。その目的とはすなわち彼らが主に近づき、人と親しくなれるように助けること、この世にあってまた永遠にわたって与えられる主の祝福を完全に享受するように助けることである。私たちがこれらのことを熱心に追い求めるならば、必ずや成功するに違いない。

活発化のために私たちは一致協力して働かなければならない。このような努力は教會の他の面での成功に影響を及ぼすのである。私たちは確かにそのような努力を続けなければならない。

この点に関しては私たちの中にもあまり積極的でない人がいる。願わくは、私たちの努力が最初の悔い改めを結ぶ実とならんことを。

4,800キロにかけた婦人

E・テール・レバロン

「1,600キロを走り抜くということがどんなものか私にはよくわかります。本当に苦しいものです」とメイビス・ハッチソンは語っています。

実際、それは1,600キロどころではなく4,800キロの旅となりました。この53歳の南アフリカ人は1978年、ロサンゼルスからニューヨークまで走り続け、文字通りアメリカ大陸を横断しました。そして彼女は南アフリカのヨハネスバーグに戻ってからバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となり永遠の旅のスタートを切ったのです。どちらの旅もチャレンジに富んだものであり、同時に限らない報いを備えたものです。

「私は息子たちを追い回すことから始めたのです」と彼女は冗談まじりに語っています。しかしそれは本当でした。彼女には6人の子供がいますが、最初下のふたりの息子がランニングを始めました。そして37歳の時、彼女は自分の健康のためにと子供たちとジョギングを始めたのです。1963年、トランスバールでは競歩がとてもはやりました。そんな中でメイビスはいつの間にか「国中でトップ競歩者のひとり」となっていたのです。彼女はその競歩が好きでした。絶えず忍耐力を伸ばし、自己訓練と自己発見をすることができたからです。

メイビスは自分を運動家などと思ったことは一度もありませんでした。彼女の父親ジョージ・ボーンはキンバリーでランナーとしてまたラグ

ビー選手として活躍していました。「世界最大の人造穴」のあるこのキンバリーで、彼はダイヤモンド採掘会社の社員として働いていました。神経質な子供だったメイビスは、十代の初期に舞蹈病（聖ワイトウス舞踊病）にかかり、3度にわたって3カ月間もの療養生活を余儀なくされました。6人の子供の母親、そして現在は7人の孫のいるこのヨハネスバーグのアーネスト・ハッチソン夫人の生涯で、ランニングなどというものは考えも及ばないことだったのです。

歩くことから始めた彼女はクロスカントリーランニングにまで手を広げました。そして南アフリカ共和国に女性のクロスカントリーを正式なスポーツとして認めてもらうよう熱心に働きかけました。結果的に彼女は、もっと多くの仕事を引き受けることになりました。1969年、彼女は外国における南アフリカを代表する最初の女性チームのマネージャーに任命され、英国一周を果たしました。

このころまでに彼女はランニングに真剣に取り組むようになっていました。そして彼女は「世界一厳しいマラソンのひとつ」*Comrades' Marathon*（同志マラソン）に出場しました。海拔760メートルのピーターマリッツバーグを出発点として「海沿いの町ダーバンまでのスリルに満ちた87キロの道」を走るのです。これは「下りマラソン」と言われるもので、毎年交互に行なわれている「上りマラソン」は、ダーバンを出発点としてピーターマリッツバーグまで息絶

え絶えに上っていくものです。

その頃には、走ることが彼女の人生になっていました。彼女は自らにむち打ってもっと大きな試合へと挑戦していきました。そして1978年、彼女は生涯最大のふたつのチャレンジに直面したのです。ひとつはアメリカ合衆国横断マラソンを完走すること、そしてもうひとつはモルモンの宣教師のメッセージを受け入れることでした。

彼女は合衆国へ向かおうとしていた矢先、宣教師に出会いました。しかし「最後の準備におおわらの時」だったので、また来てくれるように頼みました。

1978年3月12日、ロサンゼルス市役所の階段に立った彼女は、自分が精神的にも肉体的にも「生涯最大のチャレンジ」に立ち向かっていることを知ったのです。「それは私の最大の望みだったのです。でもなぜかとても不安でした。本当に走れるのだろうか。私の前には何が待っているのだろうか。十分な力があるだろうか。よく準備はしてきただろうか。もっと良識をもって家に残った方が良かったのではないだろうか。」

時計が9時を打つと同時に彼女はスタートを切りました。それから2台のバンに付き添われて毎朝午前4時に出発、食事の時に立ち止まるだけで1日14時間走り続けました。13の州を走り抜き、3つの時間変更線を越えました。一度に一步ずつ踏み出してその数は600万歩に達しました。彼女は25足のくつを順番にはき替えて走り、くつの修理回数は40回にも上りました。

天気の方は、まるで計算されたかのように変化に富んだものでした。4週間、彼女は厳しい暑さの中、重い足どりで走り続けました。そして次の4週間、幾度となく足元を狂わせるような強風の中を懸命に走り抜いたかと思うと、今度はひどい寒さの中をトラックスーツ2枚、ベレー帽、手袋、ジャンパーに身を包み、その重さに耐えてよろめきながら走り続けました。その

後は7日間、止むことなく雨が降り続けました。1枚のレインコートでは1時間もすれば体がぬれてしまいます。そこで彼女は、レインコートを2枚着ました。その結果、4時間ぬれずに走ることができました。

彼女が大変な思いをしたのは天気だけではありませんでした。「車がとてもこわかった」と彼女は語っています。ある危険な直線コースでは、車が7秒ごとにすごいスピードで走り過ぎました。彼女はただ1日走るのを休みました。それは33日目のことでした。向こうずねが肉離れを起こしたため続けることができなくなったのです。しかし翌日、彼女は歯を食いしばり文字通り右足をひきずりながらコースに戻りました。

「私はこの苦痛に耐える勇気を求めてたびたび祈りました。」彼女はこう回想しています。「神に痛みを取り去って下さるように祈ったではありません。痛みに耐えられるように助けを願ったのです。」彼女はマラソンの間中たびたび祈りました。「『神様、どうぞ風に立ち向かう力をお与え下さい。最後まで走り抜くことができよう忍耐力と意志力をお与え下さい。』今まで私は一度も完走できそうもないなどと思ったことはありません。しかしその日1日をどうしたら走り抜けるか、次の1時間をどう走り抜いたらよいかと思い迷うことはありました。そんな時私はいつも、ジョン・ヘンリー・ニューマンの美しい讃美歌の次のような言葉で祈りを捧げました。『神よ、足もとを守りたまえ、遙かまでとは願わずと。』（讃美歌119番『とりまく闇の中を』）

こうして次第に天気が和らぎ、「最後の2日間は絶好の天気となりました。」彼女はスピードを上げてニューヨークに入り、5月20日の正午前、ついに市役所に到着しました。彼女は太平洋岸から大西洋岸まで合衆国を横断した歴史上唯一の女性ランナーとなったのです。69日と2時間40分を走り抜いた彼女は喜びと興奮に包まれながらもゴールが「あまりに突然やって

きた」ことに驚きの色を隠せませんでした。

それは価値のあるものだったでしょうか。「はい。私は自分の突飛な夢をとにかく実現しました。大変な仕事でもよく備えさえすれば、不可能なことは何もないことを学びました。年齢は関係ありません。ハンディになるものは何もありません。とにかく自分でやらなければならないのです。だれも自分の代わりに走ってはくれないのです。私はまた失敗も大切なことだと知りました。私たちは失敗から教訓を得、忍耐や努力、失望を受け入れる力を学びます。」

あの厳しいマラソンは、何らかの現実的な方法で彼女に福音に対する備えをさせてくれたのです。あの開かれた道は「私の心を開いて、未知の分野に私を到達させてくれました。私には自分を見いだす用意ができていたのです。」失敗の恐れや困難な仕事から来る苦痛を克服した彼女は、真理を尊び偽りをさらう揺るぎない自己を確立したのです。そして長距離走という「完全な孤独」が、彼女に喜びを見いだす気持ちを起こさせたのです。

ヨハネスバーグに戻って1カ月もたない頃、自己発見につながるもうひとつのチャンスが訪れました。前とは違う別のふたりの宣教師が彼女の家を訪ねたのです。彼女は6回のレッスンに熱心に聞き入りました。「私が彼らの訪問をととても喜んだので、彼らはそれからずっと欠かさず来てくれました。」しかし彼らが次の土曜日にバプテスマを受けてはどうかと勧めた時、「私はすっかり驚いてしまい、次の土曜日は忙しいこと、そしてこれからずっと忙しくなると自分に言いかけました。」

しかし彼女は、自分自身のことをあまりにも知り過ぎていたため、この二度目の大きなチャレンジを断ることはできませんでした。「私はただ言い分けをしていただけなのです。私がかも教会に加わらない方を選んだとしたら、また自分の道を見失ってしまうこともよくわかっていました。なぜなら私の生活には前にはなかつ

た光があることを知っていたからです。」

彼女の下さなければならない決断ははっきりしていました。しかしそれを実行することは容易なことではありませんでした。家族の中で彼女だけがバプテスマを受け、ただひとり教会員となるのです。そして生涯の3分の1を今までとは違った生き方をしていかなければならないのです。これらは確かに胸の痛むことでした。しかし彼女は祈りました。そして「天父のみたまが私に正しいことをしなければならぬと告げるのを感じた」のです。みたまはまた「私だけがそれを選ぶことができる」とささやきました。

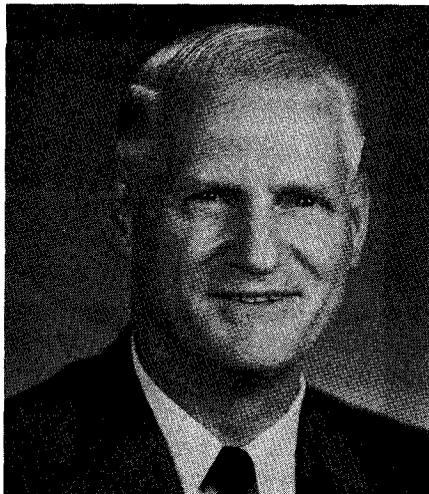
彼女はついに決心しました。1978年9月30日午後4時30分、彼女はラマ教会堂でバプテスマを受けるために順番を待っていました。その時の気持ちは、ロサンゼルスでの経験を思い起こさせるようでした。「私と一緒にバプテスマを受ける人が大勢いました。その人たちは確信に満ちていてとても落ち着いていました。またとても幸福そうでした。それに比べ私はとてもおどおどして、不安で、何かとてもみじめな気持ちでした。私は十分に準備をしてきたでしょうか。正しいことをしていただろうか。それはとても大きな約束です。本当に守り通すことができるか心配でした。」

教会に入ったことは価値のあることだったでしょうか。前と同じように確かにその通りでした。「私は自分が正しい決心をしたと思っています。これからも次の1歩を踏み出すために力を祈り求めるようなことがたびたびあるかもしれませんが。しかしバプテスマを受けた後、私は目的地に到達できることを知ったのです。これこそ私の生涯で最も大切な旅なのです。」

バプテスマを受けてからの彼女は、日曜学校書記、扶助協会の社会の教師、訪問教師、そして当然のことながら活動委員会の体育アドバイザーとして活躍してきました。

質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



ウィリアム・E・ベレット

ステーキ部祝福師，ブリガム・ヤング大学
教会歴史と教義学部名誉教授

神権の力によらずに、
病を癒すことが
できるでしょうか。

この質問について考えると、主の使徒たちが救い主に向かって尋ねた言葉がうかんできます。

「『先生、わたしたちはある人があなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちの仲間でないのです、やめさせました』。

イエスは彼に言われた、『やめさせないがよい。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方なのである。』(ルカ 9：49—50)

癒しが善いことであるのは明らかです。しかし、その方法は神権の儀式のほかにも、健康に役立つ習慣、薬草、薬、信仰の祈りなど、いろいろなものがあります。

神は健康の指針として知恵の言葉を与えて下さいました。また、薬効を持つ様々な草を地球におかれしました。アルマ書には次のように記されています。「年毎に時季によって流行する熱病で死んだ者もあるが、気候の性質によって人がかかり易い病気の原因を除くために、神が用意したもうた草根木皮の効能が著しかったので、熱病で死んだ者はさほど多くはなかった。」(アルマ 46:40)

いにしへの昔から、文明と名のつくところにはまじない師がいて、数々の生薬を用いて多くの病気を治療してきました。そして現代では、神が地上に知識を注がれ、医者はその知識を用いて人々の病気や苦しみを和らげ、文明初期の生薬をはるかにしのぐ効果をあげています。

このように神は私たちの苦しみを癒すために様々なものを備えて下さり、それがすべて利用されるように期待しておられるのです。多くの人々の頭を悩ませている問題は、昔ながらの自然療法や現代の医学療法では考えられないようなやり方で、病人の治療が行なわれてきたという事実です。これは一般に「信心療法」と呼ばれ、肉体を超越した精神の力を通して、あるいは神の力の働きによって病気を治すと考えられています。

肉体を超越した精神の力について学んで

いくと、私たちの精神には健康増進に寄与する優れた作用があり、そのメカニズムはほとんど解明されていませんが、実際に効果が上がっていることが分かってきます。しかし、これらの作用はまだおぼろげに認識され始めたばかりで、治療に応用するまでには至っていません。

肉体を越えた精神の力が作用することによって、数限りない病気が癒されています。たとえば、原始社会の医者は時々回りくどい方法を用いて、病気が治るといふ信仰を患者に植えつけました。このような方法でしばしば病気が治るのは、医者のお呪文によるからでなく、自然の法則に従って精神が肉体に影響を及ぼすことができるからです。

クエーカー教団の開祖である偉大な説教者ジョージ・フォックスは、病気が神への不従順に対する罰であると考えられる場合に限り、再発することは多くとも、信心療法である程度の成功が得られると主張しました。そのほかアラビアのメッカのような聖地でも、信心療法で病気が治ることがあります。しかし、実際に癒された人は全体のごくわずかな割合にしかすぎません。また、信仰復興運動を進める人々の集会で信心療法が行なわれた例もありますが、苦痛の軽減が永続するものかどうかは疑問です。さらにクリスチャン・サイエンティストは、苦痛は実在せず、人間の精神機能による錯

誤にすぎない、と熱心に主張しています。

私の考えでは、肉体を超越した精神の力が働いて病が癒された場合、その多くは悪魔に操られる人ではなく、善意をもつ人によって行なわれたものと思います。聖地で病気が治るという信仰を例にとっても、これは必ずしも悪魔の仕業ではなく、むしろ神が定められた自然の法則をまだ解明されないままに適用しているにすぎないのではないかと思うのです。また、このような治療をすべて悪魔の為せる業だと見なすとすれば、病人の信仰を育もうとしている善良な人々に不当な目を向けることになると思います。たとえその治療に呪文やまじないが使われ、ある場合には神のみたまが少しも現われていなかったとしてもです。

しかし、中には邪悪な目的を持った食わせず者がいて、精神と肉体とを結ぶ真の法則を悪用していることも忘れてはならないと思います。悪魔は悪い行ないしかできませんが、悪事をたくらむ人間は往々にして善悪の区別がつかない行動をとるものです。ブリガム・ヤングは当時横行していた催眠術を見て、次のように述べています。「催眠術は真理がひっくり返されたものである。元来は神聖で善と義に則した原則が、悪魔の力によってひっくり返されたのである。……悪魔の力によって生じた原則があれば見せて欲しい。そのようなものを見せるこ

とはできないだろう。私に言わせれば、悪は善のひっくり返されたもの、悪用された正しい原則である。」(*Journal of Discourses* 「説教集」3:156—57)

正しい原則が悪用された例は、聖書や教会歴史の中に記されています。たとえば、エジプトの魔術師は悪魔の力を借りて、モーセが神の力によって行なった数々の奇跡をそっくりまねて見せました。(出エジプト7—8参照) 古代の使徒の時代に、魔術師シモンはサタンの力を神聖なものとしてもっともらしく披露したので、「小さい者から大きい者にいたるまで皆、彼について行き、『この人こそは「大能」と呼ばれる神の力である』」(使徒8:10)と言いました。1830年、モルモン経の8人の見証者のひとりハイラム・ページは、ある石を手に入れ、それを通して教会に関する「啓示」を受けたと主張しました。彼が受けたと称する啓示は、ジョセフ・スミスが主から授けられた啓示と食い違うものでしたが、それにもかかわらずオリヴァ・カウドリをはじめ幾人かの教会員は、偽りの方法で与えられた啓示にだまされてしまいました。そこで主はオリヴァに次のように命じられました。「汝の兄弟ハイラム・ページを連れて行き、彼がその石によりて記録せしものはわれによるものにあらずサタンの欺きしことを彼に語るべし。」(教義と聖約28:11) それか

ら8年後に、ハイラム・ページは教会を去りました。以上の例から明らかなように、サタンは神のまことの僕が行使する権能と非常によく似た強い力を使わせて、多くの人々を欺いていたのです。したがって、正しい原則は善悪のどちらが目的であっても用いることができると言えそうです。

さて、癒しには善から出るものと悪から出るものがあることが分かったところで、神権による癒しについて考えてみましょう。信仰の力だけで生み出される癒しには限界があります。しかし、病人の信仰に神権の権能による癒しの儀式が加われば、いかなる限界も存在しません。キリストがニーファイの民に勧められた言葉を味わって下さい。

「汝らの中に今病める者あるか。その者たちをここに連れ来れ。汝らの中に足なえ、めくら、びっこ、かたわ、らい病人、痿えたる者、つんば、またはいかなる病にてもあれ悩める者は、その者たちをここに連れ来れ。われは汝らを憐み、汝らに対する慈悲の心にて溢るばかりなれば、これらの者を医さんとす。」(Ⅲニーファイ17:3)

神権による癒しでは、病める人の信仰も非常に大切な要素となります。つまり、神権というまことの権能に対して偽りのない信仰を持たなければなりません。この信仰

が言わば媒体となって、望むような作用が体に引き起こされるのです。マルコの福音書には、生まれ故郷のナザレの町に行かれたイエスは、人々の不信仰のゆえに、少数の人しか癒すことがおできにならなかったと記されています。(マルコ6:5参照)

神の神権者が信仰のあつい病人に手をおくならば、強力な癒しの力が神権者から病人の肉体と霊に注ぎ込まれているのです。この力は紫外線やレーザー光線のように実在し、正しい状況が整いさえすれば、病人の体にはるかに強力な影響力を与えます。ブリガム・ヤングは次のように説明しています。

「私は病人に手をおく時、癒しの力と神の力が私を経て病人に達し、病気が去るのを期待する。」(*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p.162)

正しく神権を行使することによって病人に注がれる癒しの力は、世の人々には理解できないものですが、神の民には広く知られ、実証されています。以上述べてきたように、末日聖徒は神権による癒しの儀式を伴わない信仰だけの力を認める一方で、神の神権が持つより強力な癒しの力を求めています。この神権は他のあらゆる形の癒しを包含しており、必要とあらば、他の何にもまさる権能と癒しの力を発揮するのです。(教義と聖約42:44参照)

小さな本

ジャック・フェルシヨー



私がまだ10歳の時に感じた、神の愛に対するあの燃えるような証は、今もなお、私の心を熱くさせます。それはひとつのとても恐い出来事に遭遇して、自分を支えてくれる力を必要としていた時に与えられたものでした。心の奥深く根を下ろしたその証は真理追究への足掛かりとなり、後には福音に対する証、そして末日聖徒イエス・キリスト教会へと私を導くことになったのです。

話はマギーおばさんと、そのおばさんが私の一番年下の妹にクリスマスプレゼントとしてくれた「十戒」という一冊の小さな本から始まります。私の知っている人で、マギーおばさんほど天使に近い人はいませんでした。それで私は何の疑いもなく、その本に書かれていることにはすべて従わなければならないと思ひ込んだのです。

おばは聖書を愛していました。その人生は無私そのものであり、時々家族が集まるとよく、イエスの教えを学び、それを毎日の生活の道案内とすることの大切さについて話したものでした。私はおばの家にいると暖かで安らかな気持ちを感じました。そしてその小さな本を読み、ひとつの家族を描いたさし絵を見ると、その安らかな思い

がよみがえってくるのでした。自分の家庭もこんな家庭にしたいと思ったものです。

あれは妹のエドレスと弟のウェイドと一緒に、家から畑を隔てた所にある砂丘で遊んでいた時のことです。ふと何か空模様が変わったような気がして、空を見上げると、嵐を伴ったたけり狂うような黒雲がすさまじい勢いで近づいてくのが見えました。前にもそのような嵐を見たことがありました。一度は風車をめちゃくちゃにし、畑の周りの木立ちの枝をもぎ取り、小さな納屋の建ってる位置を動かしてしまったこともありました。

私たちは恐怖に駆られ、エドレスは泣き始めました。私は弟とふたりで、エドレスの手をひき、家に向かって走り出しました。しかし、妹の足では長い道のりを速く走ることもできず、牧草場と果樹園の向こうに家が見えるあたりまで来ると、思うように進むことができなくなりました。息せき切って進みながら、私は「大丈夫、神様が守ってくれる。あの『十戒』に書いてあることを守る人は、神様が守ってくれるんだ」と言い続けました。

何べんその言葉を繰り返したことでしょう。なかば下の子たちを元気づけるように、



なかば祈るようにして、『主は小さい子供を愛しているのよ。』『神様が人に望んでいるのはその戒めを守ることだけなの。人が願ひさえすれば、神様は助けてくれるのよ。』私もとても恐かった。しかしふたりを恐がらせないために、それを表に出すことはできませんでした。風の勢いが強くなりきらない内に、家にたどり着かなければならないとはわかっている、エドレスのたどたどしい歩みでは、それもかないませんでした。それでも、おばの言葉、あの小さな本に書かれていたことなどから、私は主が助けて下さると確信していました。

そしてあの証が来たのです。ちょうど桃の木の間を過ぎて、りんご園にさしかかった時でした。燃えるような、そして心を奮立たせるような暖かいものが私の体の中に押し寄せてきました。そして、私が恐がる弟と妹に話していることが真実であるときさやきかけてきたのです。その燃えるような思いを私は決して忘れません。私は自分の体が何かとても大きくなったような気がしました。もう恐れはありませんでした。風の勢いはますます強くなり、ひょうや大粒の雨が降り始めましたが、私は皆無事に家に帰れると心に思いました。

母が私たちを見つけて駆けて来ました。エドレスは母の腕の中に抱えられ、私たちは家に向かって力の限り走りました。

後で私はあの果樹園の道で経験した事柄を、ひとりで思いめぐらし、あれは非常に霊的な出来事であり、あの「十戒」に書かれた事柄と関係があったのだということを知りました。でも私は、母や祖母、そしてマギーおばさんたちが宗教に関する話を聞くのを聞き、あの体験は「十戒」の本の内容よりもはるかに多くのことを示唆していることがわかりました。そして、私が自分で心に確信することが主が私たちに求めておられる生き方であるということを知ることができました。そして、私が自分でもはるかに多くのことを示唆していることがわかりました。そして、私が自分で心に確信することが主が私たちに求めておられる生き方であるということを知ることができました。そして、私が自分でもはるかに多くのことを示唆していることがわかりました。

あの時の経験は私の宝となりました。そして後に末日聖徒の人々に会った時、子供の時に味わったと同じあの燃えるような思いを再び味わったのです。それについても、聖書に対する真摯な態度、そしてあの小さな本を贈ってくれたことなど、マギーおばさんへの感謝の念は言い尽くすことができません。



嵐

キース・ブラウンの話より

楽しいキャンプが突如凍りつく雨と洪水との戦いになる。ずぶ濡れて疲れ切ったスカウトたちに決断が迫る。避難所を探すか死か。

シエラ山に降る夏の雨は大抵2、3時間でやんでしまうので、その時も私は大して心配しなかった。私は少年たちに、荷造りをして雨の中をベンチバレーの湖へ出かけることを告げた。そこは、つりをするには最適の所だった。私たちはそれまでの4日間をキャンプや山歩きをして過ごしていたので、熱帯の嵐ノーマンがカリフォルニアで暴れ回っていたとは知るよしもなかった。ノーマンは、猛り狂う風雨を引き連れ、海を騒がせてアメリカ大陸をわがもの顔で横断しようとしていたのだった。しかし何も知らない私たちは、その9月の第1月曜日、冷たい雨に心地よささえ覚えていた。

監督つまり私とワード部の探険好きな少年たちがシエラ山で1週間過ごすのは、恒例の行事となっていた。私も若い頃シエラ山を何度も歩き回ったことがあったが、そのせいか監督となった今、一緒に山を歩くことほど少年たちを身近に感じさせてくれるものはないと思っている。さて、それは私が指導者として同行する6回目の山歩きだった。しかも、今までで一番楽なものだった。まず、私のほかにリッチ兄弟とクリスチャンセン兄弟という成人者が同行してくれたこと、そして第2に、少年の内の7人は前に一緒に来た経験があったことである。初めてシエラ山に登るのは、14歳のふたりの少年だけであった。そのうちのひと

りスティーン・ナイトは、兄が去年山から帰って来て、魚つりや友達のこと、また自然の美しさについてあまり強調するので自分も行く気持ちになったのであった。もうひとりの初心者カート・ムーディも胸をわくわくさせていた。が、彼らも普通の初心者のようにちょっとした問題をたびたび引きおこした。荷物を背負いにくいとっては不平を言い、足首がはれた、筋肉がつったと泣きごを言った。しかしそれはともかくとして、その日は全員が11キロの道のりを思う存分歩き回った。私たちは小さな流れをいくつか渡り、広い牧草地を通り抜けてやっとベンチバレーへとたどりついた。

「まだキャンプの用意はするんじゃないぞ。できればテントを濡らしたくないからな。ひとまずポンチョのままで雨が止むのを待とう」と私が言った。

私はその時もまだ、雨はいつものようにすぐ止むだろうと考えていた。しかし、雨は午後になっても止む気配を見せなかった。そこで、私たちはしかたなくテントを張ることにしたのだった。

「かわいた木を割って火をおこそう」と私が言った。

するとジムが尋ねた、「雨ですぐ消えちゃうんじゃないですか。」

「その岩かげで火をたくんだ、少しは雨よけになるだろう。とにかく、雨でも消えないようにたくさん燃し続けるしかない。」

雨に濡れながらも暖かい夕飯を食べた後、私たちはそれぞれのテントに入って雨の止むのを待った。風が吹き始め、雨は止む気配を見せない。

「ブラウン監督！」

その声には私は目を覚ました。夜、雨はま

だ降り続いている。と、私のテントの外にスティーンがびしょ濡れになって震えながら立っていた。

「僕たちのテント漏るんです。僕びしょ濡れで寒くて死にそうです。」

私は、スティーンを私と一緒にテントのスティーン・リッチと一緒に寝かせた。スティーンは自分のテントの入口をあけ放したままで来たことを私は知らなかった。その夜、彼と一緒にテントのカートはずぶ濡れで寝ていたのであった。

それから数時間後、私は何か冷たいもので息をふさがれたような気がして目を覚ました。雨で地面がゆるみ、テントのくいが風で吹き飛ばされてしまったのである。テントの片方がつぶれて、たまっていた雨が私たちの上にどっと落ちてきたのだった。私はやっとのことでテントのくいを直し、もう一度火をおこしに行った。しかし帰ってみると、今度はもう片方がつぶれていた。私はまたそれを直してテントの中に入った。そうして、やっと体を暖めることができた。

やがて雨のキャンプ地にも夜明けが訪れた。キース・ネルソンとマーク・ネルソンが、彼らのテントから15センチと離れていない所に池ができているのを見つけた。さらに、ほかのふたつのテントの間には川の流れさえできていた。荷物は濡れないように突き出た岩の下にしまっておいたのだが、水の勢いが強くてずぶ濡れになってしまっていた。ほとんどの少年たちの寝袋も濡れてしまった。私たちの周りを囲むがけから滝のように水が流れ、その水は谷へと下っていた。まさに劇的なながめであった。否、恐怖のながめと言ってもよかった。

クリスチャンセン兄弟が言った。「ここから離れた方がいい。洪水にのまれる恐れが

ある」

「ここはかなり高いんでしょう。雨が雪に変わるかも知れないよ。そうしたら吹雪にやられてしまう」スティーブン・ヤングは言った。

ふたりの言う通りだった。私たちはもっと暖かい所を求めて下ることにした。そして、手早くキャンプをたたんだのだった。

「食糧はどのくらい持っていけばいいんですか。もどるのに全部持っていく必要はないでしょう」スティーブ・リッチが聞いた。

「そうだね、必要なだけ持っていけばいいだろう」私もそれに同意した。

と、カーネル・ハンセンがつぶやくように言った「きょうは、車に帰ろうよ、もう雨はいやだよ。」

少年たちは皆、大きな声で賛成したが、私には自信がなかった。

「しかし、この雨の中をきょう中に32キロも歩けるかどうか……。念のために4食分の食糧を持っていこう」

「監督、4食分ですか」

「そうだ、さあ、出かけるぞ」

それからの道のりは悪夢に変わった。洪水の不安はまさに的中したのだった。ズボンのすそさえ濡らさずに渡った小川が荒れ狂う大河に姿を変え、私たちをさらって下に引きずり込もうとするのだった。いたる所から滝のように水が流れ出ている。道さえも川になってしまったのでたどるのは困難であった。風は行く手の枝々をむちうっている。私たちはわき道を見失ってしまい、マクソンメドウズまで大まわりしていかなければならなくなった。と、私は確か去年牧場の中に森林警備隊員の小屋があったことを思い出した。そこなら避難できるかも知れない。私たちは冷たい風と雨の中を



ゆっくりと進んで行った。やっと牧場を見渡せる所までたどり着いた時、私たちは思わず足を止めた。

「湖！」

なんと、牧場はひざの深さまで水に埋まってしまっていた。小屋は、まるで箱舟のように見えた。水かさはどんどん増している。これでは小屋に入るのは無理だ。私たちはその水の中を進んで行った。

水は私たちの腰のあたりまで達した。体が冷えきって、私たちはだんだんみじめな思いになった。

「みんな、がんばって歩くんだ、もう少しで外に出られるからな」私は少年たちを励まして言った。

しかし、私はフォールクリークのことをまったく頭に入れていなかったのである。それはほんの小さな川で来る時に通ってきたものである。その時は、幅が約3メートルで30センチの深さであった。それが今は、どしゃぶりの雨で岸が洗われ30メートルの幅に広がった上に、深さは私たちの背を楽に越えるほどになっていたのである。

しかし、川は渡らなければならない。事

態は最悪のところまできていた。私たちはずぶ濡れで体は凍るようだった。暖めようにも方法がなかった。ほとんど全員の寝袋は濡れていたし、避難所もない。しかも木はすべて水につかっている。一体水の量がどのくらいあるのか、それは測り知れなかった。

川は是が非でも越さなければならない。しかし方法がない。歩いて渡るには深すぎる。波が荒いので到底泳ぐことはできない。ましてや広すぎて橋をかけることもできない。川上はがけになっていて、深い峡谷の間を水が流れている。そこを渡るのはまず無理である。私は天父に、モーセのようにどうにかして川を分けることができるようにと祈った。私たちは、渡れるような道をさがすために川下へ行ってみることにした。

400メートルぐらい行ったところで、リッチ兄弟が偶然川のまん中に太い松の木がひっかかっているのを見つけた。前にも川にかかっている松を見たことはあったが、そのような大木は初めてであった。松の木は兩岸まで届いていなかったが、両端が川岸近くのちょうど腰の深さのところに沈んでいた。そこまではなんとか歩いていけそうだった。

まず、リッチ兄弟が安全を確認するため川を渡り始めた。松の木に上がると松は一瞬水の中に沈んだようであったが、すぐに定着した。リッチ兄弟は慎重に松の上を向こう端へと渡って行った。そしてたどり着くと、下りて川の中を岸へと歩いて行った。

私は3番目だった。2、3歩行き始めて私は足を止めた。ふたりの少年は助けなしには渡れないことを思い出したからである。振り向いたが、私の後ろにはすでにほかの少年たちが丸太を渡り始めていた。

「キース」私は叫んだ。ブロンドの背の高い少年がこちらを向いた。

「スティーブと一緒に渡るんだ、何かあったら助けてやりなさい。」

彼はうなずいた。

「ジェフ、君はカートを助けてやれ」

「わかりました」ジェフが答えた。

キースとスティーブがつるつるする木の上を渡り始めた。洪水で流された木や枝やくずが丸太でせき止められている。

「ほら、ここに足をかけて」キースがスティーブを導いている。しかし、キースの言葉を取り違えたのか、スティーブが足をかけた枝は流れのあわの中に消えていった。と、スティーブも沈み始めた。背中の荷物が彼を完全に流れの中へ引き入れてしまった。川は彼を丸太の下へと押し流し始めた。そのままではスティーブはおぼれてしまう。あわててキースが近寄ってスティーブの荷物をつかんだ。そしてぐいとひと引きして、やっと彼を丸太の上にもどした。

どんなに怖くても前に進まなければならない。ふたりはまた丸太を渡り始めた。が、またもや危険がスティーブを待ちかまえていた。スティーブが乗った何本かの枝が折れてしまったのである。スティーブは再び頭まで水につかり、木の下に流されそうになった。キースがまた彼を引き上げた。

こうした後で、スティーブはすっかりおびえて先に進めなくなってしまった。キースが彼の荷物を背中からはずして運んでやった。そして、キースに頼りながらスティーブはどうか無事に丸太を渡り終えたのだった。

岸に上がるやいなや、スティーブは震

え始めた。体が冷えきっている上におぼれそうになったことでかなりのショックを受けたらしかった。

「さあ乾いた服に取り替えよう」そう言って、私は彼の恐れを少しでも取り除こうとした。私はスティーブンに自分の下着と毛糸のセーターを着せてやった。また、少年のひとりが荷物の中から乾いたズボンを持ってきてくれた。

彼が着替えている間に他の少年たちが木を渡ってきた。

「気をつけてな、おまえはスティーブンより大きいから僕の力で引っぱり上がることができるかわからないから」ジェフがカートに話している。

ふたりはゆっくりとこちらへ向かい始めた。その時木がぐらっと揺れ、カートはバランスを失って川に落ちてしまった。彼はなんとか木につかまったのですっぽりと水に入ることはなかった。しかし、川の流れと荷物の重さでカートは木の上には上ることができなかった。ジェフにも彼を引っぱり上げる力はなかった。ふたりはしばらくの間むだな抵抗を繰り返していたが、やがてジェフ自身もバランスをくずしそうになった。それでもジェフはなんとかカートの背中から荷物を取ることに成功した。それから、カートは無事に丸太を渡って川を越えることができた。

しかし、それで危険が去ったわけではなかった。カートにも私の乾いた服を着せたが、スティーブンはまだ震えが止まらずにいた。体はすっかり乾いていたが、震えがひどくて口もきけないほどだった。全員が体を暖める必要があった。しかしどうすればよいのかまったくわからなかった。

道具も衣類も、木も地面も、本当に何も

かもが濡れていた。体温は下がり、風は、余計に寒けを感じさせた。ただひとつ考えられるのは、歩き続けることだった。リッチ兄弟もクリスチャンセン兄弟もこれに同意した。とにかく脱出することだ。しかし、雨は止む様子もなく水かきは増すばかりだった。

私たちは歩き続けた。私の体も冷えきってきた。頭がぼうっとしてはっきりとものが考えられなくなった。私は、これが低体温症の兆候であることに気づいて恐ろしい気持ちになった。体温が下がるにつれて、体が自らを暖める能力を失うのである。これは、ハイカーにとって非常に危険なことであった。私は、ふたりの少年が最後まで持ちこたえてくれるか不安になった。

私は2、3人の大きい少年たちに先に行き、乾いた木がないか見てくるように頼んだ。そして、神に祈った。

15分ほどたった頃私たちは彼らに追いついた。どうやら倒れた木を見つけたらしい。

「なんとか半分に分れました。真ん中の乾いた部分を取り出したんですが、マッチが全部濡っていて火がつかないんです」ジェフが言った。

「これがある」そう言って私は持っていたライターを差し出した。「これを使おう」カチ、私はライターをつけた。しかし何の反応もない。もう一度カチッ。前と同じだ。カチ、カチ、カチ。

「燃料がないんだ」だれかが言った。

「そんなはずはない、来る前に買ったばかりだ」私は繰り返しライターをつけた。だが火はつかなかった。

あきらめて私はマッチを取り出した。ありがたいことにそれはまだ濡れていなかった。1本ずつ試みる。しかし火はつかない。

2本目、やはりだめだ。全部すったが、つくのは1本もなかった。

「天父よ、私たちが助けを必要としているのはご存じでしょう。ふたりの少年は、暖めなければ死んでしまうかも知れないのです。もし私たちがこの雨と風の中で濡れたまま一晩過ごすとしたら、私も死んでしまうかも知れません。どうか体を暖めるために火がつくように助けて下さい。お父様の助けが必要です」私は祈った。

私たちは全員のマッチをすててみた。しかし、ひとつとして火はつかなかった。

「天父よなぜですか。私は彼らの監督です。私たちはみんな、天父の助けを必要としているのです。なぜ祈りを聞いて下さらないのですか。お父様が必要です。どうかお見捨てにならないで下さい」

しかし、答えるのはふきつける雨ばかりだった。

「主よ、こうなった今、すべてを主にお任せします。私はもうどうしてよいかわかりません」

私たちはまた歩き始めた。私の体は激しく震えていた。時には少年たちの胸の深さまである川の中を歩かなければならないこともあった。ただ、来る時に木につけた印だけが私たちを正しい方向へと導いてくれた。しかし、私たちには最後まで歩き通すことができないのはわかりきっていた。ふたりの少年たちの歩みは遅くなっている。行く手にはもうひとつの川があるというのに。しかも、それは一番大きい川であった。不可能なことは目に見えていた。

「少年たちの両親に何と言ったらいいのだろう。教会の青少年のキャンプがこんなふうになるなんて。妻は、一体7人の子供をどうやって育てるだろうか。末のメラ

ニーはまだたったの2週間だというのに。もう、2度と会えなくなるのか。」私の心配はつるばかりだった。それでも私は、前にも増して熱心に、絶えず祈った。

ほとんど絶望に近い中で、私たちは雨に身を任せながら歩き続けた。疲れた身をひきずりながら、とぼとぼと角を曲がった。と、どうだろう。目の前に小屋が見えたのである。それが確かに本物の小屋であるとわかるまでにしばらくの時間を要した。しかし、間違いなく小屋であった。煙突からは煙が上っていた。マクソンメドウーズにある水浸しになったものを除けば、この辺りではただひとつの小屋であろう。それは、パシフィックガス会社と電気会社が冬の間降雪量を調べるために使っていたものだった。

小屋には、すでに4人のハイカーたちが避難していた。火が赤々と燃えていた。傍らにはたき木が山積みされ、そのほかにも毛布や食糧などが入った缶かんがいくつも置かれていた。助かった。

私たちは体を暖めると、神の導きに心から感謝を捧げた。私はふと、もしあの時火がついていたら今頃まだ嵐の中で苦しんでいたに違いないと思った。

「天父よ、私が火を求めて祈った時答えて下さらなかったことに感謝します。これから心に不満や疑問が生じた時には、どうか思い出させて下さい。助けは次の曲がり角にあるということ。」

ライターをつけてみた。火は1回でついた。

嵐は、私たちを2日半の間山に引きとめた。そして雪で白くなった地面を踏みながら私たちは家路についたのであった。

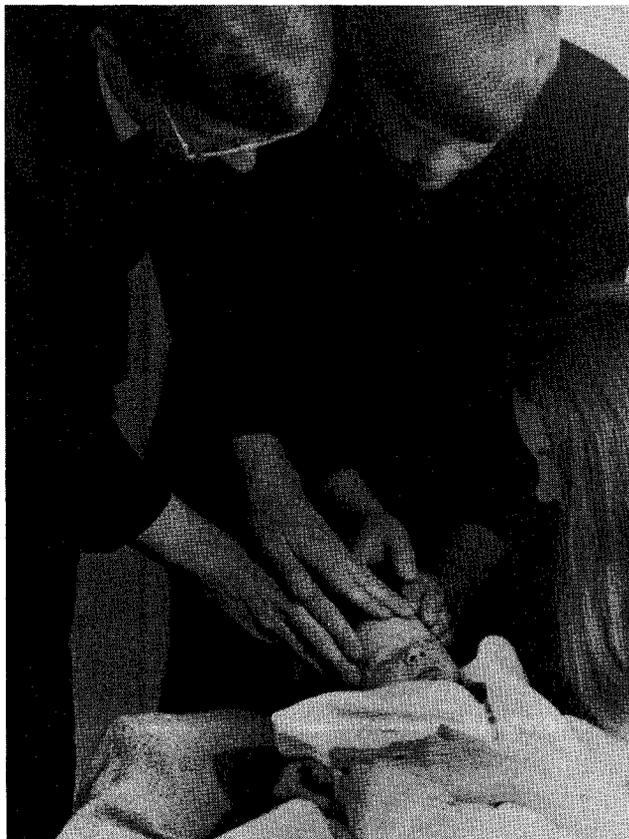
神権の力が確かに存在した

A・ヘイマ・ライザー

湿った空気が凍りついて肌につき刺さるような夜だった。息をするたびに、煙突からはき出された石炭の煙が鼻をつく。あたりは霧に包まれ、夕闇の中であすます

見通しが悪くなった。イギリスの冬は、いつもこうだ。

伝道に出て2カ月目の私は、同僚と一緒に大急ぎで自転車を走らせた。近くの町で



姉妹宣教師と会うことになっている。さきほどの電話の声から、姉妹たちが心を痛めている感じが感じられた。近くに住む会員が助けを必要としているのである。

私たちは電話を受けてから取るものも取りあえず駆けつけると、姉妹宣教師と一緒にその会員の家を訪れた。ドアを叩くとひとりの女性が現われて、私たちを招き入れた。中はとても狭く、部屋の片隅には暖炉がある。薄暗い光に女性の顔がうつった。ふっくらとした顔立ちだが、疲労と悲しみのあまり目は真っ赤に充血し、涙に濡れたまつ毛がくもっている。暖炉のそばの子供用ベッドを指さした。またひとすじ涙が頬を伝う。彼女は泣きじゃくりながらこう言った。「赤ちゃんが病気で、呼吸困難で、お医者さんは助からないと言いました。」イギリスでは厳しい冬の寒さのために、たくさんの乳児が気管支炎や肺炎を起こして死んでいた。

母親は、癒しの儀式をして下さいと言った。そして、生まれてわずか3週間の小さな赤ちゃんをベッドからそっと取り上げ、両腕でかばうように優しく抱いた。赤ん坊をくるんだ清潔なリンネルには、涙がとめどもなく流れ落ちた。赤ちゃんの頭はまだ小さく、私の大きな手をすっかり按くことはできない。それでも小さく柔らかい頭に手を按くと、繊細な髪の毛の感触が伝わってきた。

病人のために癒しの儀式をするのは、これが初めてだった。私はどうにか間違えずに次のように宣言した。「ソーニャ・ハルバート、イエス・キリストのみ名と聖なるメルケゼデク神権の権能により、……」その

時、私の体中に力がみなぎるのを感じた。それは今まで味わったことのない特別なものだった。疑う余地はない。私はそのいたいけな赤ん坊を癒すために、全能の神のみ手に使われる器になったのである。

その後、時が経つにつれて、この時の経験はしだいに薄らいでいき、記憶のかなたへ押しやられていった。2年ほど経って伝道も終わりに近づいた頃、私はあの母子が住む町で再び伝道することになった。同僚とふたりで街頭伝道をしていると、求道者がやって来て、この近くに教会員が住んでいると言った。さっそく私たちはその家を捜し、ドアをノックした。イギリスの街並はどこもよく似ているので、その家が2年近く前に訪れた家だとは、すぐに気づかなかった。姉妹に招かれて、あの小さな部屋に入ってみると、明るい青い瞳がじっと私を見ていた。私は椅子に座った。するとそのかわいい女の子が私のひざに乗ってきた。金髪の巻き毛をなでてあげると、その時である。あの日の記憶が洪水のようによみがえった。重苦しい夜、涙にぬれた母親、あえぎながら息をする赤ん坊、そして紛れもない神権の力。私は心の中でつぶやいた。「父よ、感謝します。この幼い子供を救うために神権を行使する特権を与えて下さったことを。」

この経験によって、私は強められた。そして、はっきりとした確信をもって次のように証できるようになった。「神権がこの時代に回復されました。神は生きておられ、私たちを愛しておられます。そして、偉大な祝福が、神の神権を義しく行使することによってもたらされます。」

告白

管理監督会第一副監督 J・リチャード・クラーク

何年前のこと、ひとりの少年が窃盗というゆゆしい行ないの現場を捕らえられ、刑務所に入れられた。両親は慌てふためいたが、その筋の高位の人に知り合いがいるから大丈夫、釈放は間違いないと息子に請け合った。そして彼の監督は、(この人も善意からではあったが)君は有望な青年であり、罰を受けないでも済むように、できる限りのことをするつもりだと言った。しかしこの青年は最後に、怒りを爆発させるようにして言った。「あなたは、僕に対して自分がしていることの意味がわからないでしょう。僕は罪を犯したんですよ。僕が罪の償いもせずに釈放されることにでもなれば、あなたは僕に一生罪の重荷を負わせることになるんですよ。お願いですから、罪の意識から逃れられるように、償いをさせて下さい。」

明らかな良心、それに伴う安らぎ、これに勝る賜はない。悩める人を癒すことができるのは、救い主イエス・キリストの力を除いてほかにない。しかし、主の癒しを願う人は、主が私たちに与えられた順序を踏み行なう必要がある。

告白は完全な罪の赦しを受けるための欠かすことのできない条件である。それは真の「神のみこころに添うた悲しみ」のひとつのしるしであり、罪を清めるための一過程である。新たな出発をするには、良心という日記の中に、真っ白な1ページが必要なのである。告白は自分の行ないによって害を受けた人と主の両方に対して行なわなければならない。そして、その過ちが重大なものである場合は、正当な権能を持つ、

神権管理役員に対して告白しなければならない。

「すべての人が、あるいはすべての神権者が罪人の告白を聞く権限を与えられているわけではない。主は秩序正しい、首尾一貫したプログラムを定められた。教会のすべての会員は教会の管理役員に対して答えなければならない責任がある。(モーサヤ26:29;教義と聖約59:12参照)ワード部であれば監督に対して、支部では支部長、ステーキ部や伝道部ではそれぞれの部長である。権能の段階のもっと上の方に行けば、大管長と十二使徒会を頭とする教会幹部である。」(スペンサー・W・キンボール「赦しの奇跡」p.337)

監督に対する告白が求められる過ちとしては、姦通、婚前交渉、その他の性的な罪、倒錯、またそれに類する重大な罪がある。キンボール大管長はこう注意している。「妥協やあいまいな点があってはならず、完全に隠しだてのない告白でなければならない。」

(「赦しの奇跡」p.190)このことを覚えていただきたい。私たちが望んでいるのは、悩める人々がその苦しみから完全に解放されることなのである。予言者アルマは、自分は永遠に燃える火によって滅びかかっているという思いを味わい、「私は大いに苦しんでさまよった末、死ぬほどの苦痛を感じて悔い改め」たと語っている。悔い改めはたやすいことではない。しかし、「神のみこころに添うた悲しみ」は人を低くへりくだらせる。赦しの賜が非常に甘美なものであり、罪を犯した人を特別な愛の絆をもって、救い主のみそば近くに引き寄せるのは

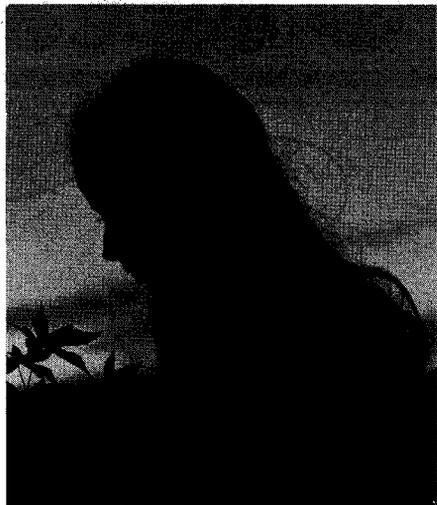
このゆえんである。

私は監督をしていた時、自分の責任で最も難しくはあるが、心を清めてくれるのは、ワード部という家族の「共通の判士」となることであると感じた。心からの告白を聞く時に、自分が神から与えられた責任を果たし、理解するということが、いかに難しいものであるかを知った。また私は、自分が自分だけに特別に打ち明けられているその事柄を固く、心に秘しておくという誓約のもとにあるということを理解した。そして、みたまによってどのような対処の仕方をすべきか理解できるように、何度知恵を求めて祈っただろうか。そして私は、最も思いやりのある裁きとは、その行ないに相当する正当な「報い」を与えることによって、完全に満たされるまで正義を貫くことであるということ学んだ。その過ちに対して、当然受けるべき報いを受けないことは、部分的には条件を満たしても、その負債を残し、罪の重荷の一部しか取り除くことができないのである。監督は同情心から、罪を大目に見るように、心を動かされることがある。しかし、正義を抜きにした憐れみは、思いやりではない。

完全な悔い改めはその人を自由にし、言い尽くせぬ喜びをもたらす。

アルマはこのように述べている。「ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。

……私がある時に感じたほどの激烈な苦痛がこの世にまたとあろうか。またその時



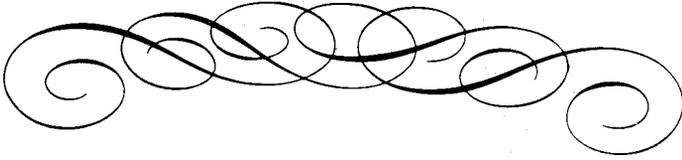
に感じたほどの甚しく美しい喜びがこの世にまたとあろうか。」(アルマ36：20—21)

私は、自分の罪を監督に告白することなく、その代価として時間や財産を惜しむことなく捧げ、また奉仕に務めようとして、何年もの間、心にその重荷を負ってきた教会員たちと接してきた。しかし、そのような人々は良き行ないをもって、告白に代えることはできなかった。キンボール大管長が説明しているように、私たちは樽の中から悪いリングをすべて捨てて、新たに始めなければならない。(「救しの奇跡」p.190)

安易な道、近道をもって、主の方法に代えようとしてはいけない。きょう、監督に電話し、「監督、実は問題があります。監督の助けが欲しいんです。おうかがいしてよろしいでしょうか」と言うように決意しようではないか。監督はその言葉の意味を理解することだろう。そして、彼は特別な鍵と靈感を授けられており、あなたが新たに、喜びに満ちた生活を始める助けを与えてくれるであろう。

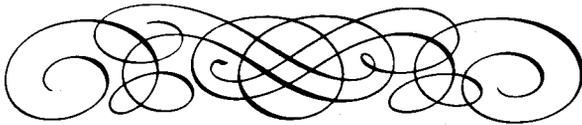


小さいとも 小さなお友だちへ



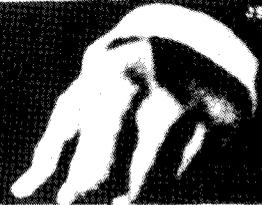
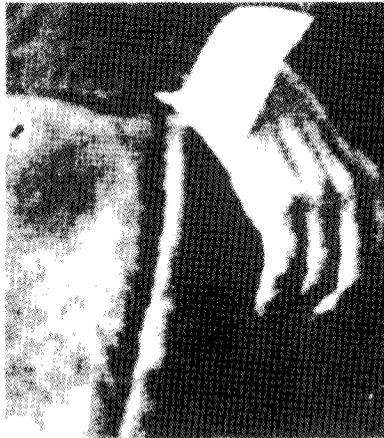
パロワンでの出来事

オリーブ・W・バート



18 54年2月、よく晴れたある寒い朝のことです。バルチモアから来たひとりの若い絵かきは、あたたかいジャケットをはおり、ぼうしをかぶると、外に散歩に出かけました。彼はユタ州の南部の小さなモルモン村を探険しようと思ったのです。その前の日の午後、彼はすっかり体がつかれていて気分がすぐれなかったためにあまりよく村を見ることがで

きませんでした。今にも死にそうな大ぜいの仲間といっしょに、その日を生きのびれるかもわからず、奇跡を望む気持ちもないまま、やっとの思いで山々を通りぬけて来たのでした。しかし、彼らが真下の谷に見たものはまさしく奇跡でした。村があったのです。そこに立ちながら家々は小さくほとんどが雪におおわれていましたが、石のえんとつからはけ



むりがまっすぐ立ちのぼっていて、食べ物と休む場所があることを示していました。

この絵かきの名前はソロモン・ナン・カルバロといいました。彼はジョン・C・フレモント大佐（合衆国の将軍、探険家1813—1890）といっしょに冬の寒さの中、ロッキー山脈を横断したのです。

カルバロの一行は、ロッキー山脈までは無事に来ることができました。しかし、ロッキー山脈にたどり着いた時にはもう12月になっていて、あたりはすでに冬に入っていました。ロッキー山脈を越えることはむずかしく危険でした。寒さと雪のため旅は遅れました。食糧はインディアンに盗まれ、たくわえも底をつき、馬を殺して食糧にしなければならなくなりました。2カ月以上もの間、彼らはロッキー山脈との戦いを続けたのです。そしてとうとう、あの2月の午後、病気と疲れに弱りはてた隊員たちは、パロワンの村に着いたのです。

その地域の400人のモルモンは心を開き、疲れきった探険隊の人々に

家を開放してくれました。親切なくつもの家族が隊員を家に招いて食事をさせ、やわらかいきれいなベッドを用意してくれました。

他の人々と同様に、カルバロも旅の途中であらゆる困難にたえました。彼は、フレモントをのぞいて他のだれよりもつらい思いをしました。たびたび寒い冷たい夜に遅くまで起きていて、フレモント大佐が星を研究しながら地図を作るのを助けたからです。しかし食事をし休息をとったおかげで、カルバロは元気をとりもどしました。そして、パロワンの村で、彼は驚くようなことをたくさん見つけたのです。カルバロはこう書いています。

「散歩をしていると、アドビーレンガの小屋の前を行ったり来たりしている人に出会いました。その人はとても沈んだ様子でした。私は彼に近づき、どうしてそんなに悲しうなのかとたずねました。するとその人の6歳のひとり娘が夜、急に亡くなったというのでした。私は彼の指さす戸口から中に入って行きました。

きれいにととのえられたわらのマ

ットレスの上に横たわっていたのは、天使のような子供でした。顔には静かなほほえみをうかべ、それは死という永遠の眠りというよりも、やさしい健康的な眠り、休息しているという感じでした。雪のように白いひたいをきれいな巻き毛がおおっていました……そと入って行ったので、ベッドの中で顔をまくらにうずめ、胸がはりさけんばかりにすすり泣いている母親は、私に気づきませんでした。

考えつく間もなく、私は目の前の少女の死体のスケッチを始めたのです。そして30分もたたないうちに、すばらしい似顔絵をかき上げました。

ちよつとした動きに気づいて、その母親は顔を上げ、あたりを見回しました。彼女が私の方を見たので、私は家に入ったことをわび、知事から要請された隊の一員であることを話しました。……そして私は自分のノートを一枚切りはなして彼女にあげました。その時の彼女の喜びようを言い表わすことはできません。彼女は私を、慰めを与えるために天からつかわされた天使だと言いました。

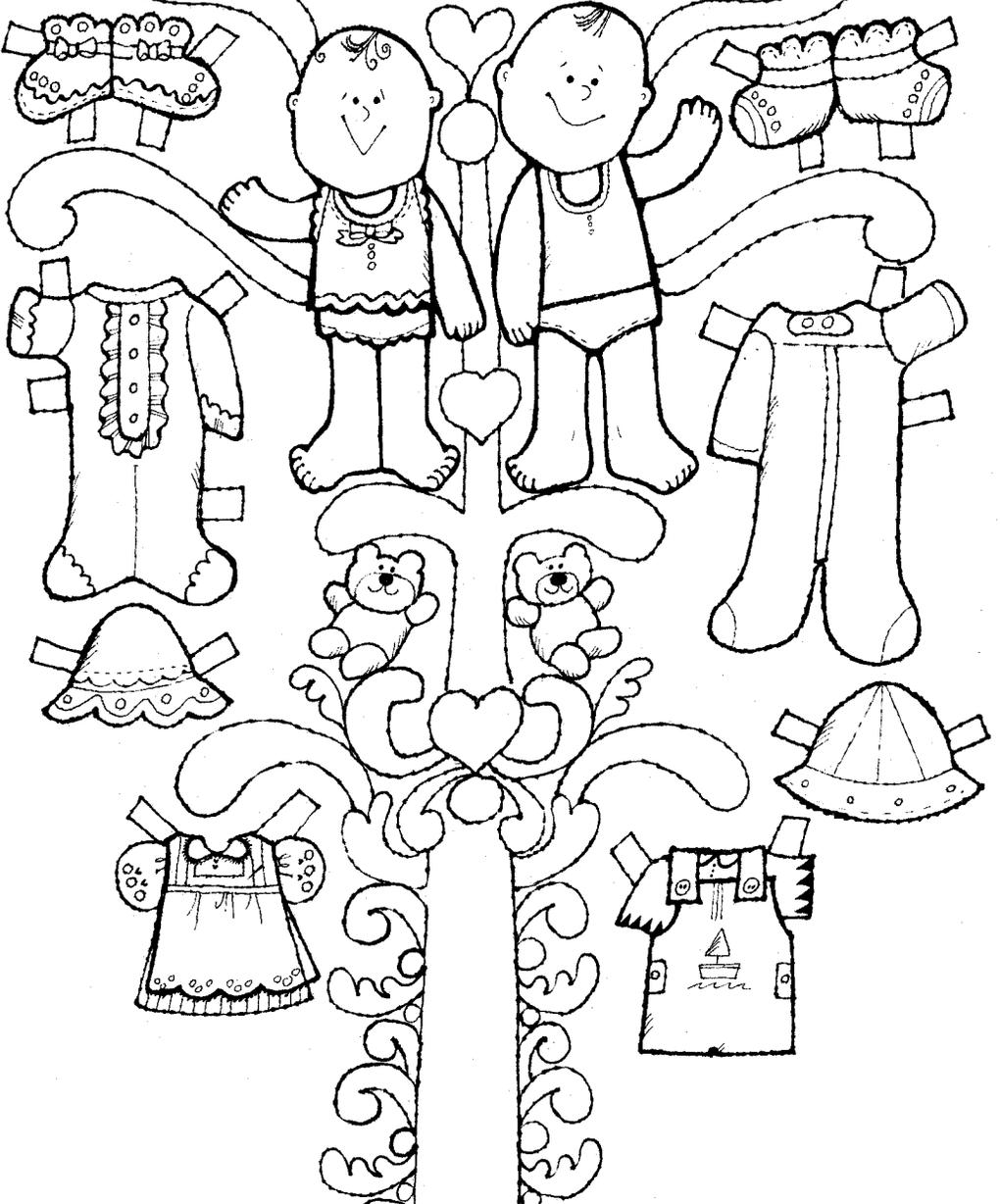
彼女はその子供の写真を一枚も持っていないからです。私は彼女に「与えそして取り去られる」御方に信頼を置くように言い、悲しみに沈む父親に気づかれないようにして外に出ました。そして、この出来事の不思議なめぐり合わせに思いをはせました。

次の日、村を立ち去ろうとしていた私は、馬車の中に玉子やバターやパンがいっぱい入ったかごがあるのを見つけました。かごには私あてのメモがついており、こう書いてありました。『心からの感謝をこめて。』

その絵かきガスケッチした少女は、メアリー・アン・ハリソンという人でした。彼女の家族はその鉛筆でかかれたスケッチを大事にとっておき、それを見てはあの日の不思議な話をくり返ししてきました。1950年、パロワンの町ができた百周年記念行事で、そのスケッチの原画は町の美術館に展示されました。その絵は、2月のある寒い日のすばらしい行ないを、人々に語り伝えているのです。



きせかえにんぎょう



ジョリーン・メレディスによるある教会幹部^{かんぶ}
の奥さんと子供たちへのインタビューより。

(この教会幹部の名前はこの記事
の終わりのところに出ています)

小さな お友だちへ

ジョリーン・メレディス



「私」の主人の家はとてもびんぼうで
した。母親はじゅうたんを作っ
て市場で売っていましたが、父親は羊
の世話をしたり、まきを割ったり、家族
のために水を運んだりしていました。」
この教会幹部の美しく若い奥さんは、
ひざの上で赤ちゃんをあやしながらこ
のように話してくれました。

「彼の家は十人家族で、遠くはなれ
た砂漠地帯の、一番近い町からでも24
キロもはなれた所に住んでいました。
そこには川もなければ車もありません
でした。飲み水がひどくよごれている
ので、人々はかわりによくフルーツジ
ュースやソーダ水を飲んでいました。

主人は4歳の時、とても重い病気に
かかり、いしきがなくなりました。み
んなはもう死んだものと思いました。
そして彼をまいそうするためにひつぎ
に入れました。少したってから、ひつ
ぎの中からかすかにノックする音が聞
こえてきました。生きていたのです。
みんなが急いでひつぎをあけると、彼
は立ち上がって『ソーダ水がほしい』
と言いました。

その時から、彼は『ソーダぼうや』
として知られるようになりました。両
親はよく、このことがあってから彼が
変わったと言いました。前よりももっ
と責任感が強くなり、家族の人々のめ
んどろをよく見るようになったのです。
人を思いやるようになり、何か特別な

みたまを受けたようでした。

家族の主食はビスケット用の粉で作
ったあげパンと羊の肉のシチュー、そ
してソーダ水でした。今でも彼は、こ
しょうをふりかけて食べるからいもの
が好きです。

主人は10歳の時、末日聖徒の宣教師か
ら市場でバプテスマを受けました。そ
して、その時からずっと教会の活動に
参加してきました。彼は選ばれて教会
の教育プログラムに参加することにな
りました。そして里親として世話をし
てくれる家族と一緒に住んで学校に行
くために、ユタ州に行くことになりま
した。バスが発車する1時間前、友だ
ちのブルームフィールド兄弟がやっ
てきて彼の頭の上にもるいうつわを置き、
すばやく散髪してくれました。彼の持
ち物はみなくつ箱におさまりました。
彼は他にくつを持っていなかったから
です。彼のはいていたデニムのズボン
はあなただけで、残っているズボンの
布よりも穴の方が大きいほどでした。
ブルームフィールド兄弟に2ドルもら
い、朝までには向こうに着くだろうと
いう言葉に送られて、彼は夜行バスに
乗りました。」

この教会幹部の奥さんはこのように
続けています。「ユタの新しい学校での
最初の日、子供たちはみな主人のまわ
りに集まりました。その子供たちは前
に一度もインディアンを見たことがな

かったのです。『君の顔にぬる絵の具はどこ？』『モカシはどれ？』と子供たちはたずねました。

新しい両親は、自分たちのインディアンの息子がとてもはずかしがり屋なので心配しました。最初の3カ月間で彼の話せた言葉は『はい』と『いいえ』だけでした。クリスマスの時、両親は彼に新しい服を買ってくれました。ズボン2着とシャツ4枚、それにくつ下2足でした。お母さんは彼に二階に行って着てみるように言いました。しばらくしてから彼は、買ってもらったズボンとシャツとくつ下を一度に全部身につけておりました。新しい言葉や習慣になれるのは大変でした。

主人は今とてもいそがしいのですが、よくフットボールやバスケットボールをします。またあまりないことですが、ひまな時にはハーモニカをふきます。去年のクリスマスには教会幹部のクリスマスパーティーで、幹部のためにハーモニカを演奏しました。

主人は、家庭の夕べは子供たちを指導者として訓練するすばらしい機会であると信じています。彼はいつも子供たちのひとりに司会をたのみます。そしてひとりがお祈りを決め、讚美歌を選びます。そして最後に、司会をした子供は参加してくれた人全員に感謝の言葉をのべます。普通は、レッスンをしてくれた人が特によく感謝されます。

そして閉会の歌が発表され、わり当てられた人が閉会のお祈りをします。

ある朝、主人は教会のオフィスで早朝の集会があるため5時に家を出なければなりませんでした。子供たちがちよつど起きたころに彼から電話がきて、私たちは電話の向こうの父親と一緒に家族の祈りをしました。」

彼の小さな子供たちはこのように言っています。「パパはおうちに帰って来るといつも私に食事をすませたらおうまになってあげるっていうの。時々、私のお友だちも乗せてくれるわ。」

「パパはぼくが伝道資金をためるのを助けてくれるんだ。」

「パパは私たちにきれいにすることを教えてくれるわ。私たちがお皿を洗ったあとでいつも流しの台をきれいにしておくように言うの。」

「パパってやさしいわ」

「パパといっしょにフットボールする時は、言葉づかいはよくしなきゃならないんだ。」

ご主人の好きな話題は何かという質問に、彼女はこう答えました。「主人はいつもはだの色がどうでも私たちはみな神の子供たちであると言います。そして私たちの教会には偏見へんけんはあり得ないと。彼の話はレーマン人だけでなく、教会全体を代表しているのです。」

(譯者—(i・d・c—E・C) : 茅

2つのステーキ部，誕生

去る5月30、31の両日，日本東京南ステーキ部と日本広島ステーキ部がそれぞれ組織された。これにより日本におけるステーキ部の数は20となった。

なお，ステーキ部長会のメンバーには以下の方々が召された。

日本東京南ステーキ部



第一副ステーキ部長
津田 政廣



ステーキ部長
小野 和俊



第二副ステーキ部長
鈴木 茂

日本広島ステーキ部



第一副ステーキ部長
成林 孝治



ステーキ部長
西原 里志

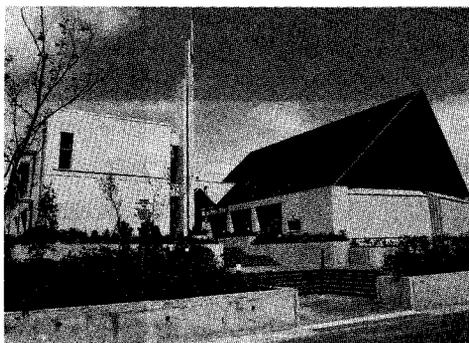


第二副ステーキ部長
歌島 浩之

町田ステーキ部センター竣工

昨年より建設が進められていた町田ステーキ部センターがこのほど完成し，5月31日(日)に，竣工記念のステーキ部大会が催された。

大会には多くの方に集っていただくとうと末日聖徒の人生観やモットー「感謝と親切」の心など，なじみやすい内容の話が取り上げられた。また，当日朝早く，田中健治長老はじめ



たくさんの神権者が伝道を目的に，近隣の各家庭に大会案内のちらしを配って回った。

新しいこのステーキ部センターの誕生が

地域社会に少しでもよい助けをもたらすものであるよう私たちは心よりお祈りしたい。なお，ステーキ部センターの所在地は以下の通りである。

町田市本町田1391

☎(0427)25-3253

■地域指導者訓練プログラム■

スケジュール決定

伝道開始80年記念行事の一環として計画されている地域レベルでの指導者訓練プログラムの日程が以下のように決定した。

このプログラムには、教会本部からふたりの指導者が来日し、全国各地を2週間にわたって巡回、指導を行なう予定である。また、各部門の担当者もすでに決定し、それぞれ地区の各部門の指導者への連絡、指導を行なっていくことになっている。

なお、時間や場所など、詳しい内容については、それぞれの地区代表を通して連絡される。

月 日	朝	午前	午後	夜
8/18(火)	(東京 → 仙台)	仙台 ①		仙台 ㊂
8/19(水)		(仙台 → 札幌)		
8/20(木)		札幌 ①		札幌 ㊂
8/21(金)		(札幌 → 名古屋)		名古屋 ㊂
8/22(土)		名古屋 ①		(名古屋 → 東京)
8/23(日)		東京 ㊂	東京 ㊂	
8/24(月)		東京 ①		(東京 → 沖縄)
8/25(火)		沖縄 ①		沖縄 ㊂
8/26(水)		(沖縄 → 福岡)		福岡 ㊂
8/27(木)		福岡 ①		(福岡 → 広島)
8/28(金)		広島 ①		広島 ㊂
8/29(土)		(広島 → 大阪)		大阪 ①
8/30(日)		大阪 ㊂	大阪 ㊂	(大阪 → 東京)
8/31(月)				
9/1(火)		奉 献 記 念 日	(於：横浜)	

() 内は移動、 ①はトレーニング ㊂は一般大会を表す。

ここに紹介する仙台の松川音太郎兄弟（53歳）。彼は三重苦（目、耳、口が全く不自由）の障害を持つ教会員です。

5年前の5月15日、かつて仙台で伝道をしたことのある奥様の敏子姉妹と結婚し、今は、幸せな信仰生活を送っています。

「初めて彼に会った時は、結婚は思ってもみませんでした。でもお付き合いするうちにだんだん彼の人柄がわかり、苦楽を共にして人生を歩んでいきたいという気持ちが強くなりました。彼との結婚を一度も後悔したことはありません。今はとても幸せです。ほんとうによかったと思っています。これからも神様とイエス・キリストに対する強い信仰をもってふたりでがんばっていきたい」と語る敏子姉妹。彼女のこうした生き方には、松川兄弟の人一倍の努力のみならず、私たちを啓発してくれるものがあります。

次に松川兄弟の信仰あふれる証を紹介しましょう。

困難に出会っても がんばりましょう



松川音太郎兄弟

このたび、心の弱った人に話したいと思ってちょっと書きました。いつか東京の教会でも証したり、聖餐会の話もしたいと思います。希望を失った人も、弱っている人も、孤独な人も、悲しみを持っているままできくじけないで、できることなら悲しみから離れて、人に知られなかったせつなさをくやしく思って、造り主なる天の神様に立ち返ってください。神様は喜びも安心も与えてくださるという約束を持って待っておら

れます。心にかたく信仰の根をはらせて、どんな悩みにもくじけないでいく決心をして下さい。心に信仰の根がはっていないとどんな素晴らしい大会にも集会にも、出席してもただ楽しむだけで、だんだん信仰は弱っていくのです。いろいろ悩みを乗り越えて、信仰をもっていくと勝利を得るので

ヨハネは贖われた人々をまばろしで見ました。黙示録の7章にはこうあります。



昨年10月の東京地域大会にて、退場のキンボール大管長（後向右側）に別れを惜しむ松川兄弟ご夫妻。

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいって下さるであろう。」

この地上では、いくたびかあやまちも失敗も罪もあります。しかし落胆せず、気落ちせず、告白して赦しを受け、どんな恐ろしい者が現われてもキリストの死がむだにならないように、だまされたり落胆しないように頑張ってください。イスラエルの民が神様から離れて墮落した時、主は予言者ヨエルを遣わしてお語りになりました。ヨエル書2章12、13節にこうあります。

「今からでも、あなたがたは心をつくし、

断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。

あなたがたは衣服ではなく、心を裂け。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである。」

落胆しないで祈り通していけば、主は何かのみ業をなさってくださいます。イザヤは、贖われた人の安らぎの様子も予言しています。

「雌牛と熊とは食物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、ししは牛のようにわらを食い、

乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。

彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。」

（イザヤ11：7-9）

どうか、元気を出して頑張ってください。

（点字訳）

「イエスは、さいせん箱にむかつてすわり、群衆がその箱に金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持は、たくさんの金を投げ入れていた。

ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レブタニツを入れた。……

そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、『よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。』

みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである。』